

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	学校法人龍谷大学	大学名	龍谷大学
研究プロジェクト名	琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究 —Satoyama モデルによる地域・環境政策の新展開—		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトは、主として琵琶湖水域圏を中心に、自然生態系を基盤とする社会と経済の持続可能な発展関係を構築するため、「Satoyama モデル」に基づく新たな社会モデルの総合的研究を行う。近時、「地方消滅」が叫ばれ、改正都市再生措置法(平成 26 年 8 月)や地方創生関連 2 法(同年 11 月)への対応が検討される中、都市部と農村部が地理的にも強い影響関係にある日本の地方・地域社会の現実に立脚し、一定の経済圏(琵琶湖水域圏)のなかで、各関連行政、地域住民、NPO、民間企業、研究機関等の各主体が横断的に協働する、自然共生・循環型の持続可能社会のあり方について研究する。その際、里山が有する自然循環・生態系保全機能、森林育成・食と農の基盤形成機能、都市・農村の防災や景観などの生活基盤整備機能、生活・文化・社会・コミュニケーション形成機能を、物質・文化・経済・人の「循環の総体」として捉えることにより、全球スケールの環境問題を意識した新たな「Satoyama モデル」を再構築し、一定の地方・地域社会共通の基盤となる自然・社会・文化の循環型社会の実現を目指して「琵琶湖インシアティブ」の政策提言を行う。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

本研究プロジェクトでは、「水と生命」「資源と産業」「人と暮らし」の3つのテーマで研究に取り組んでいる。また、研究対象地域は琵琶湖水域圏であるが、特に愛知川流域を集約的な研究地域として選択した。「水と生命」では、「次世代シーケンサー」を用いた環境 DNA 分析により、琵琶湖本湖の湖岸と内湖で種組成に多少の差があることを見いだした。また、景観復元、景観変遷の手段として、琵琶湖水域圏における土地改変を分析可能な大縮尺の空中写真画像を作成した。「資源と産業」では、木質バイオマス資源などの利用方法の提案や、市民と森林所有者との森林共同管理の具体的方策の検討を進めるとともに、間伐材や竹幹などの炭化、広葉樹林の有効活用や資源量の把握の方法など、琵琶湖水域圏におけるバイオマス利用について、研究会や調査研究を実施している。「人と暮らし」では、GIS(地理情報システム)を用いて琵琶湖水域圏全体の地形・地質・土地利用の特徴を総合的に把握可能な景観マップを作成し、これに基づいて滋賀の酒をはぐくむ風土マップを作成した。東近江市、永源寺森林組合、愛知川沿岸土地改良区、中華人民共和国、ドイツ・オーストリアの協同組合組織、マラウイ湖国立公園、マラウイ大学など、国内外の各種機関との連携構築、調査研究を並行して展開した。また、本学が所有する「龍谷の森」で里山保全と食農に関わる実践活動を継続している。また、愛知川流域での集約的な研究を、琵琶湖水域圏全体へ拡張するための手法として、GIS の効果的な活用法を検討している。なお本プロジェクトの研究成果は、毎年開催しているシンポジウムや、不定期開催の研究会、年次報告書、学術論文、叢書、ホームページ等で公開している。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

**平成27年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書**

1 学校法人名 学校法人龍谷大学 2 大学名 龍谷大学

3 研究組織名 里山学研究センター

4 プロジェクト所在地 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

5 研究プロジェクト名 琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究
—Satoyama モデルによる地域・環境政策の新展開—

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
牛尾 洋也	法学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 47 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
総合研究班「琵琶湖イニシアティブ(仮案)」の政策と提言			
牛尾 洋也	法学部・教授	地域・環境政策	<センター長・総合研究班長、第3班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者
村澤 真保呂	社会学部・教授	環境倫理	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者
伊達 浩憲	経済学部・教授	地域・環境政策	全体の研究推進、環境政策のとりまとめ責任者
丸山 徳次	龍谷大学・研究フェロー/名誉教授	環境倫理	全体の研究推進、環境倫理のとりまとめ責任者
谷垣 岳人	政策学部・准教授	環境教育	全体の研究推進、環境教育のとりまとめ責任者
田中 滋	社会学部・教授	地域・環境政策	<第1班班長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

遊磨 正秀	理工学部・教授	環境教育	<第1班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
横田 岳人	理工学部・准教授	地域・環境政策	<第1班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
宮浦 富保	理工学部・教授	地域・環境政策	<第2班班長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
吉岡 祥充	法学部・教授	地域・環境政策	<第2班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
山崎 英恵	農学部・准教授	環境倫理	<第2班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
鈴木 龍也	法学部・教授	地域・環境政策	<第3班班長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
清水 万由子	政策学部・准教授	環境倫理	<第3班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
<第1研究班「水と生命」>			
(1)「水系環境の変遷過程」研究ユニット			
田中 滋	社会学部・教授	河川と近代化の研究	<第1研究班長> 河川・湖沼の近代化装置による環境改変とその影響
遊磨 正秀	理工学部・教授	水系環境の変遷過程の研究	<ユニット長> 人為作用による水中景観の変化が琵琶湖－河川間回遊魚に及ぼす影響
越川 博元	理工学部・准教授	水系環境の変遷過程の研究	水の再利用の研究
中川 晃成	理工学部・講師	水系環境の変遷過程の研究	画像情報からの里山流域環境の分析評価の試み
丸山 敦	理工学部・准教授	水系環境の変遷過程の研究	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る
吉田 竜司	社会学部・教授	水系環境の変遷過程の研究	河川流域における農村共同体の水利秩序のあり方を祭りという視点からの解明

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

池田 恒男	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	河川の近代化の研究	琵琶湖水域圏と砂防法、河川法 等の影響
須川 恒	龍谷大学・ 非常勤講師	水系環境の変遷過程の研究	水鳥の種別・生態の理解と湖岸 景観との関連
秋山 道雄	滋賀県立大学・ 名誉教授	水系環境の変遷過程の研究	自然調和型の住環境と防災の研究
(2)「生物多様性と生態系サービスの研究」ユニット			
横田 岳人	理工学部・ 准教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	<ユニット長> 里山の生態系サービスの質を高 める生態系機能の回復方策の提 言
遊磨 正秀	理工学部・ 教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	人為作用による水中景観の変化 が琵琶湖-河川間回遊魚におよ ぼす影響
丸山 敦	理工学部・ 准教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	環境 DNA 技術によって生物多様 性を把握する技術の発展
山中 裕樹	理工学部・ 講師	生物多様性と生態系サービ スの研究	ヒトと自然環境との相互作用につ いて生態学的視点から定性的・定 量的情報を取得し、効果的な保 全方策を決定するための基盤情 報を提供
金 紅実	政策学部・ 准教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	生態系サービスの維持・向上のた めの経済学的なインセンティブ措 置の提言
谷垣 岳人	政策学部・ 准教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	生態系保全と環境教育の結合
林 珠乃	理工学部・ 実験助手	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山・里湖の生態系サービスの 変遷
岩瀬 剛二	帝京科学大学生 命環境学部・ 教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山とその周辺環境において外 来帰化植物がもたらす役割の解 明と提言
江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	生態系サービスの経済的考察
須川 恒	龍谷大学・ 非常勤講師	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山・里海環境における鳥獣害 問題
須藤 明子	株式会社イーグレッ ト・オフィス・ 専務取締役	生物多様性と生態系サービ スの研究	カワウ管理と内水面漁業と河川 管理をめぐる課題の整理と対策 の提案

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

高桑 進	京都女子大学・ 名誉教授	生物多様性と生態系サービスの研究	里山の生物多様性を活用したエコツーリズムの企画と提案
高橋 佳孝	近畿中国四国農業研究センター・ 専門員	生物多様性と生態系サービスの研究	里山草原の生態系サービス機能を高めるための技術的方策の提言
夏原 由博	名古屋大学情報文化学部・ 教授	生物多様性と生態系サービスの研究	里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析
野間 直彦	滋賀県立大学環境科学部・ 准教授	生物多様性と生態系サービスの研究	里山の生物の現状と保全策 生態学的な獣害対策
山中 勝次	京都菌類研究所・ 所長	生物多様性と生態系サービスの研究	里山における食用菌類の活用の開発
好廣 眞一	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	生物多様性と生態系サービスの研究	琵琶湖水系の里山にすむけものたちと人の関係史
<第2研究班「資源と産業」>			
(3)「森林資源とエネルギー利用の研究」ユニット			
宮浦 富保	理工学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の研究	<第2研究班長> 里山の生産生態学的研究
吉岡 祥充	法学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の研究	<ユニット長> 里山保全の法政策
中川 晃成	理工学部・ 講師	森林資源とエネルギー利用の研究	画像情報からの里山流域環境の分析評価の試み
水原 詞治	理工学部・ 助教	森林資源とエネルギー利用の研究	バイオマス資源の再生可能エネルギーとしての利用方法の提案
池田 恒男	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	森林資源とエネルギー利用の研究	森林法政策の分析
金 紅実	政策学部・ 准教授	森林資源とエネルギー利用の研究	森林公益的機能の維持・向上のための森林資源の有効な利活用方策への提言
牛尾 洋也	法学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の研究	森林法とエネルギー政策の分析
飯國 芳明	高知大学教育研究部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の研究	森林資源の管理に関する制度の検討と素材及びエネルギー利用の展望
占部 武生	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	森林資源とエネルギー利用の研究	里山バイオマスの燃焼効率の評価

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	森林資源とエネルギー利用 の研究	森林資源の有効活用. バイオマ ス・機能性木炭の開発とその応用 と里山経済学モデルの研究と提 案
大澤 晃	京都大学大学院 農学研究科・教 授	森林資源とエネルギー利用 の研究	バイオマス生産における地下部 の資源活用方策の検討
大住 克博	鳥取大学農学部 附属フィールドサイ エンスセンター・ 教授	森林資源とエネルギー利用 の研究	里山管理上の造林学・生態学的 な問題の指摘
高桑 進	京都女子大学・ 名誉教授	森林資源とエネルギー利用 の研究	持続可能な環境教育プログラムと しての炭焼き活動の提案
高橋 佳孝	近畿中国四国農 業研究センター・ 専門員	森林資源とエネルギー利用 の研究	森林、草地資源の持続可能な利 用の提言
(4)「エコロジー的な食と農の研究」ユニット			
山崎 英恵	農学部・ 准教授	エコロジー時代の食と農の 研究	<ユニット長> 農業と食の循環における里山食 文化の価値醸成とその継承
猪谷 富雄	農学部・ 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	イネの多様性と水田保持策の研 究
渡辺 めぐみ	社会学部・ 准教授	エコロジー時代の食と農の 研究	農業と食についてのジェンダー視 点からの社会学的研究
伊達 浩憲	経済学部・ 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	茶業における環境経済学的分析
鈴木 龍也	法学部・ 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	環境配慮型農業の法政策の分析
丸山 敦	理工学部・ 准教授	エコロジー時代の食と農の 研究	粘液の安定同位体分析による琵琶 湖-河川-水田間の生物移動 追跡手法の革新
谷垣 岳人	政策学部・ 准教授	エコロジー時代の食と農の 研究	環境配慮型農業と食の研究
山中 裕樹	理工学部・ 講師	エコロジー時代の食と農の 研究	ヒトと自然環境との相互作用につ いて生態学的視点から定性的・定 量的情報を取得し、効果的な保 全方策を決定するための基盤情 報を提供
秋津 元輝	京都大学大学院 農学研究科・ 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	自給的農業実践の拡大をつうじ た食農文化の継承と創造および 農業景観保全の実現

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	里山が提供する食材・自然食の 研究とその普及と、里山経済学モ デルの研究と提案
須藤 護	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	山国日本において、とくに耕地と して利用しにくい斜面の活用事例 の収集
夏原 由博	名古屋大学情報 文化学部・ 教授	エコロジー時代の食と農の 研究	里山の生態系サービスと生物多 様性の持続的な利用に関する景 観生態学的な解析
<第3研究班「人と暮らし」>			
(5)「自然調和型の住環境と防災の研究」ユニット			
牛尾 洋也	法学部・ 教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	<ユニット長> 里山景観と防災の研究
横田 岳人	理工学部・ 准教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	里山の生態系サービスによる地 域防災機能の向上を促す方策の 提言
石塚 武志	法学部・ 准教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	都市における自然公物の管理と 防災の関係に関する法的分析
中川 晃成	理工学部・ 講師	自然調和型の住環境と防災 の研究	画像情報からの里山流域環境の 分析評価の試み
林 珠乃	理工学部・ 実験助手	自然調和型の住環境と防災 の研究	里山・里湖の GIS による総合的解 析
徐 光輝	国際学部・ 教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	資源循環型コミュニティの新た な創造
釜井 俊孝	京都大学防災研 究所・ 教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	里山成立過程の防災考古学的考 察に基づく、サステイナブル都市 構造の提言
夏原 由博	名古屋大学情報 文化学部・ 教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	里山の生態系の景観生態学的な 解析
秋山 道雄	滋賀県立大学・ 名誉教授	自然調和型の住環境と防災 の研究	自然調和型の住環境と防災の研 究
(6)「資源循環型コミュニティの新たな創造」の研究ユニット			
清水 万由子	政策学部・ 准教授	資源循環型コミュニティの新 たな創造	<ユニット長> 地域社会の持続可能な発展の研 究
鈴木 龍也	法学部・ 教授	コモンズ論からの持続可能 社会研究	<第3研究班長> コモンズ論からの法政策分析
丸山 徳次	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉 教授	資源循環型コミュニティの新 たな創造	資源循環型コミュニティの理論

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

牛尾 洋也	法学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域づくりにおける地域資源と景観構成の研究
伊達 浩憲	経済学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	環境循環型の地域づくりの研究
村澤 真保呂	社会学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	資源循環型コミュニティの理論
渡辺 めぐみ	社会学部・准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域社会づくりにおけるジェンダ－的研究
阿部 大輔	政策学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域づくりにおける文化的景観・世界遺産等の地域資源の意義の研究
金 紅実	政策学部・准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	石油由来製品依存型から地域資源循環活用の生活・消費様式への転換を目指す地域コミュニティづくりのための方策提言
吉田 竜司	社会学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	河川流域における農村共同体の水利秩序のあり方を祭りという視点からの解明
笠井 賢紀	社会学部・准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	資源循環型コミュニティの理論
江南 和幸	龍谷大学・研究フェロー/名誉教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	森林資源の有効活用や里山の食材による里山経済学モデルの研究と提案
奥 敬一	富山大学芸術文化学部・准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	文化的景観における里山の価値付けとコミュニティによる持続的な資源活用方策の検討
須川 恒	龍谷大学・非常勤講師	資源循環型コミュニティの新たな創造	生物親和都市の基本構想
須藤 護	龍谷大学・研究フェロー/名誉教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	日本人の山地利用に関する知恵を掘り起こし、里山利用の将来について提言

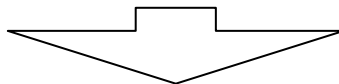
法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年6月25日)



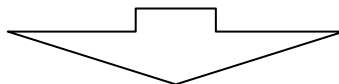
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
滋賀県立大学・ 名誉教授	滋賀県立大学・ 名誉教授	秋山 道雄	自然調和型の住環境 と防災の研究

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年11月26日)



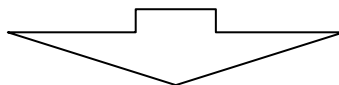
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 国際学部・教授	龍谷大学・ 国際学部・教授	徐 光輝	資源循環型コミュニテ ィの新たな創造

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年11月26日)



新

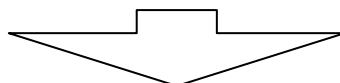
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・教授	龍谷大学・ 社会学部・教授	吉田 竜司	河川流域における農 村共同体の水利秩序 のあり方を祭りという 視点からの解明

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
エコロジー時代の食と農の研究	京都大学大学院農学研究科・准教授	秋津 元輝	自給的農業実践の拡大をつうじた食農文化の継承と創造および農業景観保全の実現

(変更の時期:平成28年4月1日)



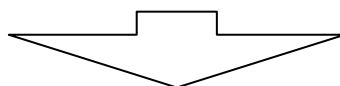
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
京都大学大学院農学研究科・准教授	京都大学大学院農学研究科・教授	秋津 元輝	自給的農業実践の拡大をつうじた食農文化の継承と創造および農業景観保全の実現

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
自然調和型の住環境と防災の研究	龍谷大学・法学部・講師	石塚 武志	都市における自然公物の管理と防災の関係に関する法的分析

(変更の時期:平成28年4月1日)



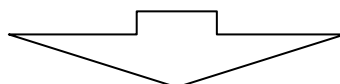
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・法学部・講師	龍谷大学・法学部・准教授	石塚 武志	都市における自然公物の管理と防災の関係に関する法的分析

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
環境倫理/資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学・社会学部・准教授	村澤 真保呂	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者

(変更の時期:平成28年4月1日)



新

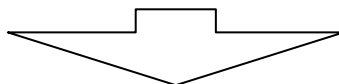
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・社会学部・准教授	龍谷大学・社会学部・教授	村澤 真保呂	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成28年4月22日)



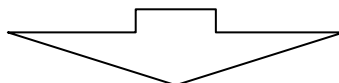
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・講師	龍谷大学・ 社会学部・講師	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
資源循環型コミュニティの 新たな創造	龍谷大学・ 社会学部・講師	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティ の理論

(変更の時期:平成29年4月1日)



新

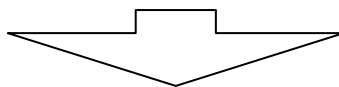
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・講師	龍谷大学・ 社会学部・准教授	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水系環境の変遷過程の研究/生物多様性と生態系サービスの研究/エコロジー時代の食と農の研究	龍谷大学・ 理工学部・講師	丸山 敦	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る/環境DNA技術によって生物多様性を把握する技術の発展/粘液の安定同位体分析による琵琶湖-河川-水田間の生物移動追跡手法の革新

(変更の時期:平成29年4月1日)



新

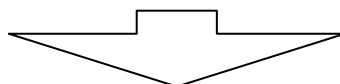
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 理工学部・講師	龍谷大学・ 理工学部・准教授	丸山 敦	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る/環境DNA技術によって生物多様性を把握する技術の発展/粘液の安定同位体分析による琵琶湖-河川-水田間の生物移動追跡手法の革新

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
環境倫理/資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学・ 文学部・教授	丸山 徳次	全体の研究推進、環境倫理のとりまとめ責任者/資源循環型コミュニティの理論

(変更の時期:平成29年6月1日)



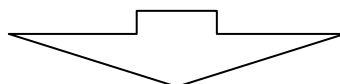
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 文学部・教授	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	丸山 徳次	全体の研究推進、環境倫理のとりまとめ責任者/資源循環型コミュニティの理論

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
河川の近代化の研究/森林資源とエネルギー利用の研究	龍谷大学・ 法学部・教授	池田 恒男	琵琶湖水域圏と砂防法、河川法等の影響/森林法政策の分析

(変更の時期:平成29年6月1日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 法学部・教授	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	池田 恒男	琵琶湖水域圏と砂防法、河川法等の影響/森林法政策の分析

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトは、主として琵琶湖水域圏を中心に、自然生態系を基盤とする社会と経済の持続可能な発展関係を構築するため、「Satoyama モデル」に基づく新たな社会モデルの総合的研究を行う。近時、「地方消滅」が叫ばれ、改正都市再生措置法(平成 26 年 8 月)や地方創生関連 2 法(同年 11 月)への対応が検討される中、都市部と農村部が地理的にも強い影響関係にある日本の地方・地域社会の現実に立脚し、一定の経済圏(琵琶湖水域圏)のなかで、各関連行政、地域住民、NPO、民間企業、研究機関等の各主体が横断的に協働する、自然共生・循環型の持続可能社会のあり方について研究する。その際、里山が有する自然循環・生態系保全機能、森林育成・食と農の基盤形成機能、都市・農村の防災や景観などの生活基盤整備機能、生活・文化・社会・コミュニケーション形成機能を、物質・文化・経済・人の「循環の総体」として捉えることにより、全球スケールの環境問題を意識した新たな「Satoyama モデル」を再構築し、一定の地方・地域社会共通の基盤となる自然・社会・文化の循環型社会の実現を目指して「琵琶湖イニシアティブ」の政策提言を行う。

(2) 研究組織

本研究プロジェクトは、龍谷大学 8 学部の研究者を中心とする文理融合による共同研究である。龍谷大学には、全学横断型・複合型・異分野融合型等の学際的研究を推進する機関として、人間・科学・宗教総合研究センターがあり、その下で個別研究センターの研究推進体制が整っている。また、大学のみならず、地域の市民向け環境教育を行い、さらに、国内外の様々な組織に対する研修機関の役割を果たすことができる。琵琶湖を見下ろす瀬田キャンパスのある滋賀、および深草、大宮キャンパスのある京都の各行政および地域社会に対し、環境・循環型社会の推進を目指す研究の拠点としての基盤と地位を確立し、地域に根ざした具体的な地域・環境政策の提案を行うとともに、同様の課題に対する普遍的な社会モデルを提唱することで、大学の公共的役割を一層高める役割を果たすことが期待される。

本研究プロジェクトでは、自然生態系に立脚した社会を構築するため、自然・客観的要因、自然要因に対する人的作用因、人の文化要因を研究対象として設定し、以下 3 つの研究班および研究ユニットをおく。研究班は、各要因の相互作用を意識し、それぞれの研究成果を共有するが、成果を体系的に取りまとめるため「総合研究班」を設置する。

第 1 の「水と生命」研究班では、「水系環境の変遷過程」研究ユニットが、第 3 班と共同で、まず対象となる琵琶湖水域圏の地理的現状や河川の現状とその変遷を把握するため、その歴史的検討、制度的検討を行う。次に、「生物多様性と生態系サービス」研究ユニットは、「次世代シーケンサー」を用い、水系環境の違いによる琵琶湖水域圏の生物多様性の変化と諸条件の研究を行い、第 2 班と共同で、環境保全型農業の生態系サービスの研究および水環境保全ツールの研究を行う。

第 2 の「資源と産業」研究班では、「森林資源とエネルギー利用」研究ユニットが、琵琶湖水域圏の環境に大きく作用する森林資源の持続可能な管理・利用を研究する。そのため、木質バイオマス・エネルギーの固定メカニズムとその利用・燃焼技術を研究し、その科学的知見をベースとして、総合研究班と共同して、地域における再生可能エネルギーの利用可能性と持続可能な森林管理の具体策を検討する。次に、「エコロジ的な食と農」研究ユニットは、環境保全型農業および新しい農業政策の研究および地域独自の「食」の研究を行い、地域における持続可能な生産と消費の構造を追求する。

第 3 の「人と暮らし」研究班では、「自然調和型の住環境と防災」研究ユニットが、第 1 班と共同で、最新の景観地理学と防災学の研究水準を取り入れ、その成果を地図上で重ね合わせ総合化する。その成果をベースに、「資源循環型コミュニティの新たな創造」研究ユニットは、あるべき都市再生や地域創生に資する循環型社会にふさわしい新しい社会の関係性構築に向けた研究を行い、総合研究班における議論のプラットフォームを作る。

「総合研究班」は、各研究班の代表者および総合研究班取りまとめ責任者で構成し、毎月の運営会議と年 8 回程度の共同研究会を開催し、研究の進捗状況と成果の共有を図り、Satoyama モデルの(1)環境倫理、(2)環境教育、(3)地域・環境政策の 3 本柱の形で、各研究班の研究推進と研究成果をと

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

りまとめ、政策提言を行う。

(3) 研究施設・設備等

- 研究施設 1: 深草学舎 紫光館 3 階事務局事務室
(面積: 140.81 m²/使用者数: 9 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度/共同利用)
- 研究施設 2: 瀬田学舎 3 号館 3 階 301 研究室
(面積: 28.35 m²/使用者数: 17 名程度/利用時間数: 月 90 時間程度)
- 研究施設 3: 瀬田学舎 3 号館 3 階 302 研究室
(面積: 26.25 m²/使用者数: 17 名程度/利用時間数: 月 90 時間程度)
- 研究施設 4: 深草学舎 紫光館 3 階 PD・RA 室
(面積: 38.32 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究施設 5: 深草学舎 紫光館 3 階展示・会議スペース
(面積: 47.04 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究施設 6: 深草学舎 紫光館 3 階展示・会議スペース
(面積: 9.85 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究設備: MiSeq®システム(DNA 増幅、シーケンサー、データ解析コンピューター内蔵)
(使用者数: 5 名程度/利用時間数: 年 167 時間程度)

研究施設 1 は、研究部(人間・科学・宗教総合研究センター)の下に、本プロジェクトの支援を行う事務室として使用している。研究施設 2-6 は、研究プロジェクトの研究打合せや会議、シンポジウムの準備作業等の業務を行う場所として、PD、RA が主となって活用している。

また、研究設備については、第 1 研究班の「水と生命」研究において、次世代シーケンサー: MiSeq システムを導入している。このシステムは、環境水中の DNA(RNA) 分析により、迅速かつ定量的に琵琶湖周辺の魚類相(魚類の生物量や種構成と遺伝的特徴)を把握するとともに、生態学的視点から、各種人間活動との関連性を調査する中で、効果的な保全方策の検討に活用している。

上記のほか自己財源や他の補助金等で整備された研究装置等 7 点も活用して研究を進めている。

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

<現在までの進捗状況および達成度>

本研究プロジェクトでは、3 つの研究テーマで研究班および研究ユニットを設けている。研究班はそれぞれの研究成果を共有するが、成果を体系的に取りまとめるため「総合研究班」を設置している。

「水と生命」の第 1 研究班は、滋賀県の愛知川をインテンシブに研究を進める主要河川として研究を進めてきた。まず、第 1 研究班の大きな成果としては、「次世代シーケンサー」による環境 DNA 分析に基づく琵琶湖水域圏の生物多様性の現状把握を行った*₁。愛知川下流域に位置する琵琶湖本湖の湖岸と内湖で調査を行った結果、両水域で確認された種がいる一方で、どちらか一方でしか確認されなかった種がいた。これにより、琵琶湖と内湖とでは種組成に多少の差があることが示唆された。また、琵琶湖水域圏の現状把握として航空写真を活用した研究を行い、高度成長期の土地改変の生じる前後を含む異なる時期における大縮尺の空中写真画像を作成した*₂。これらは景観復元、景観変遷の極めて有力な手段となる。その他にも各関連機関(東近江市*)₃や地域団体(愛知川沿岸土地改良区*)₄などへのヒアリング調査および現地視察を行った。

「資源と産業」の第 2 研究班は、地域社会や生態系を考慮した木質バイオマス資源などの再生可能エネルギーの利用方法の提案や、市民と森林所有者との森林共同管理の具体的方策の検討を進めてきた。間伐材や竹幹などの炭化*₅、広葉樹林の有効活用や資源量の把握の方法*₆など、琵琶湖水域圏におけるバイオマス利用について、研究会や調査研究*₇を実施している。一つの河川(愛知川)流域の大半を一つの自治体に含むという地理・行政区的特徴を有する東近江市とは、同市の森林・河川政策担当者との研究会の開催*₈、東近江市永源寺森林組合との連携を構築*₈し、獣害対策を中心とした里山森林整備・管理の現況の調査・研究*₉を進めた。さらに、日本における世界農業遺産に関する調査研究を引き続き行っている*₁₀。また、これらの研究をより発展させるために、国内外の各種機関との連携構築、調査研究を並行して展開した。特に中華人民共和国の「国家林業局経済発展研究センター」との共同研究・調査*₁₁、ドイツ・オーストリアの協同組合組織による森林管理システムの調査研究*₁₂、外部研究会との共催企画の開催*₁₃を行った。その他、本学が所有する「龍谷の森」にて里山保全と食農に関わる実践活動*₁₄を継続して行っている。

「人と暮らし」の第 3 研究班は、琵琶湖水域圏全体の地理的情報や環境資源に関わる情報、歴史的・文化的資源および景観資源等、地域資源に関する情報を収集してきた。その一つとして GIS(地理情報システム)を用いて地形・地質・土地利用の特徴を総合的にみた景観マップを作成した*₁₅。この景

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

観マップをもとに、第 2 研究班とともに、山や河川、旧街道などの情報と『滋賀県物産誌』から読み取ることができる明治初期に酒造りをしていた村、現存する酒蔵の情報を加え、滋賀の酒をはぐくむ風土マップを作成した*₁₆。また、実際に酒蔵(蔵元 藤居本家)へのヒアリング調査を行い滋賀県の酒の文化や歴史などについて知見を得た*₁₇。源流域(奥山)のくらしと文化を知るために木地師の暮らしや歴史についての研究会を行い*₁₈、今は廃村となっている茨川村の現地調査を行った*₁₉。これらは 2016 年度シンポジウム*₂₀の基盤となっている。さらに 2017 年にはアフリカにあるマラウイ共和国のマラウイ湖国立公園にて森林資源の利用と保全に関する調査を行った*₂₁。これらは、マラウイ湖国立公園、マラウイ大学との共同研究として現在も調査を継続中である。さらに、文化的景観における里山の価値付けとコミュニティによる持続的な資源活用方策の検討の一環として、地域資源を活用した地域活性化のツールとして東近江市において「フットパス」づくりに取り組んでいる*₂₂(最初のマップは 2018 年 4 月予定)。また、地理・地質・地形条件に基づいた地すべり等の災害情報の活かし方に関する研究を継続して行っている*₂₄。

これらの研究および取り組みをさらに発信すべく、各年度における年次報告書の刊行およびセンターHPによる公表を適宜行い、多くの関心を集めるよう取り組んでいる。総合研究班では、以上の全体の研究成果を取りまとめ具体的な政策提言に向けて議論を進めている。

<特に優れた研究成果>

本研究プロジェクトのオープニング公開シンポジウム「琵琶湖の保全再生と里山・里湖 ～人と水との共生にむけて～」*₂₃(2016 年 3 月 5 日)、2016 年度シンポジウム「流域のくらしと奥山・里山 ～愛知川から考える～」*₂₀(2017 年 3 月 4 日)、2017 年度シンポジウム「里山学から考える防災・減災 ～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～」*₂₄(2018 年 3 月 3 日)を開催した。これらのシンポジウムを通して、2015 年に成立した「琵琶湖保全再生法」の実践的方策の検討と共に、一つの水域圏を構成する広域自治体・基礎自治体・企業主体・協同組合・地域住民・研究機関の知見の共有と実践的な連携協力の場を構築した。これらは、里山学研究センターが調書に掲げた「Satoyama モデル」に基づく「琵琶湖イニシアティブ」の基礎を形成している。各シンポジウムでの成果については年次報告書として公刊・発信している。

本研究プロジェクトが構想する「循環型社会の創造に向けた総合的な研究」に欠かせない特筆すべき成果の一つとして、国内外の研究機関等との継続的な関係性の構築が挙げられる。具体的には、ドイツ・オーストリアの森林管理を担う各機関*₁₂、中華人民共和国の「国家林業局経済発展研究センター」*₁₁、マラウイ共和国の「マラウイ湖国立公園」、「マラウイ大学」*₂₀との協力および連携により国内外の森林資源の利用と保全、資源所有者とコミュニティとの適正な関係性について比較研究を進めた。

これらの研究は多数の個別の論文発表にとどまらず、総合研究班を中心として「琵琶湖水域圏」の概念を基軸とした研究叢書『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』として取りまとめることができた*₂₅。同書は、調書で掲げた研究課題を踏まえた中間的な研究集積の一端を著したものであり、「地方消滅」が叫ばれる中で、都市部と農村部が地理的にも経済的にも強い影響関係にある日本の地域社会の現実に立脚し、ある一定の圏域(琵琶湖水域)の中で、行政、地域住民、NPO、企業、研究機関等の主体が横断的に協働する、自然共生・循環型の持続可能な社会のあり方を追求している。一つの叢書に文理問わず 24 名もの研究者の研究が収められており、自然科学と人文社会科学を融合した本研究プロジェクトの特色を表したものとなっている。

<問題点とその克服方法>

愛知川流域で実践している集約的な研究*₂₆を、琵琶湖水域圏全体へ拡張するとともに、「琵琶湖保全再生法」の理念に資する成果を得るための課題*₂₇を整理し、実行する必要がある。

自然資源の分布と人間による利用について総合的に解析するモデルとして、滋賀県下の酒造が風土(地形、地質、交通など)とどのように相関しているのか、GIS 等の技術を用いて解析している*₁₆。このモデルが、各種の水利や土地改良の問題のような人文地理学的研究をはじめとする諸課題へも応用できるか検討を進め、琵琶湖水域圏の問題を総合的に捉える手段を提供したい。

さらに、本研究センターの目指すべき持続可能な社会のあり方について、JSSA(日本の里山・里海評価委員会)の 4 つのシナリオをどのように位置づけ、ミレニアム生態系評価を含め持続可能な発展評価のあり方について、新たな指針をしめしたい*₂₄。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

＜研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。)＞

これまでの里山学研究センターの一連の活動により、「琵琶湖水域圏」概念を中心とした文理および官学連携による総合的研究を推進する研究拠点を生み出すことができた。特に、滋賀県(琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課)とは 2015 年の琵琶湖保全再生法に基づく具体的な計画の設定に向けて、これまで継続的に連携強化を図り*₂₃、加えて、東近江市(市民環境部水と森政策課)とも恒常的に連携・協力し*₃、国の施策や地域の課題を適切に把握しつつ広域自治体・基礎自治体において研究成果を具体化することで、地域連携の貢献および期待を創出している。また、東近江市では、地域住民も巻き込んだ「ローカルサミット in 東近江」*₂₂(2017年12月1日から3日)への参画を含め、地域活性化の輪を広げると共に、自然との共生・循環に立脚した価値観を地域社会と共有する取り組みへと展開を広げている。さらに、国外の研究機関との連携として、東アジア圏における森林政策の課題と展望につき中華人民共和国の「国家林業局経済発展センター」*₁₁ と、森林資源の利用と保全に関する研究につき「マラウイ湖国立公園」および「マラウイ大学」*₂₀ と、継続的にワークショップや調査研究をするに至っており、今後もさらなる連携強化が図られる予定である。

＜今後の研究方針＞

最終年度に向けて、琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境を具体的に解明し、Satoyama モデルを基礎にした「琵琶湖イニシアティブ」を研究成果として発信するために、研究班ごとに具体的な研究成果の連携および具体化を展望できる段階となってきた。第1研究班では、愛知川を中心とした河川での研究を深化させるため、琵琶湖水域圏の現状の把握、次世代シーケンサーの活用、国内外の他の湖沼や河川との比較研究を積極的に進める。その際、各研究員は相互に研究をモニターし、研究の連携・統合をユニット又は班全体として常に意識し、文理連携の知見を踏まえて研究成果を統合し、水域圏の「Satoyama モデル」を構築する。第2研究班では、琵琶湖周辺の森林、農業、食料に関する基礎データの取りまとめとさらなる資料集・写真集等の出版を継続的に行う。また、行政と民間との共同による木質バイオマス利用の促進方針を打ち立てる。加えて、一定の地域において、生態系に配慮した棚田および湖岸における環境配慮型農業の取り組みを研究する。特に、魚のゆりかご水田米や赤米などの品種生産を研究し、水田の維持・存続、健康食としての米の意義および地域ブランド化のための研究を行う。これらとともに、ドイツおよび中国など国外の森林政策の現況の知見を活用しつつ、滋賀県、東近江市における具体的な森林施策との連携を構築する。第3研究班では、農村景観、水辺景観の地図を重ね合わせ総合化し、コモンズ論や環境経済学的分析を踏まえ、各種土地利用規制およびその手法の差異を勘案した総合的な考察を行う。その際には、GIS を活用し、酒蔵に関する諸条件や滋賀県物産誌の可視化を図る。これらを踏まえ、土地や地域資源のコモンズ的な管理・利用に向けた資源循環型都市構想、生物親和都市構想を提示し、資源循環型コミュニティのあり方や自然と人との新たな関係性の構築に向けた研究調査を行う。その一環として、「東近江フットパス・プロジェクト」において、「八日市てくてくマップ」を作成し、東近江市役所および東近江エコツーリズム協会との合同モニタリングを行う。さらに、奥永源寺、五個荘、蒲生町、伊庭で順次フットパスマップを作成し、フットパスに関する課題克服に向けた研究成果を公開する。

以上の各研究班の研究を踏まえて、総合研究班では、それらの取りまとめとともに、外部の研究者および行政機関、地域との連携を図るため、研究会および調査の企画、各主体の相互連携の研究拠点の創出、年度ごとの総まとめとしての公開シンポジウムの開催を通して、「Satoyama モデル」における「琵琶湖イニシアティブ」の提言を構想する。

＜今後期待される研究成果＞

総合研究班を中心として、里山の資源管理に関する具体的な課題に即した研究と、新しい理論構築に関する研究を行い、里山学研究における文理融合の新たな枠組みを提示し、最終年度には、新たな琵琶湖の保管理に資する「琵琶湖イニシアティブ」を提示する。

①シンポジウム

フットパスづくりを含め、琵琶湖周辺の地域資源管理および地域づくりに関する民間及び行政機関を交えたシンポジウムを行い、地域資源の管理と管理主体のあり方などに関する研究成果が期待される。また、最終年度には、「琵琶湖イニシアティブ」(仮)に関するシンポジウムを行い、環境評価や里山ミレニアム評価を踏まえた新たな評価指針を研究成果として打ち出すことが期待される。

②書籍

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

2018年度には、景観生態学の成果として、滋賀県物産誌に関する研究をまとめた資料集の出版を予定している。里山学研究成果を海外に発信するべく、『里山学講義』(晃洋書房 2015年)を中国で翻訳出版する作業を進めている。さらに、本研究プロジェクトとして里山学研究成果の今後の新たな方向性を示す総括的な研究を行っており、最終年度(2019年度)の3月に、成果をまとめた研究叢書を出版予定である。

③研究会や年度報告書

2018年度及び最終年度の2019年度においても引き続き、複数回の研究会の開催と、年次報告書を公刊する予定である。

④調査研究

琵琶湖に関わる水管理および森林管理の調査研究並びに景観生態学を含む生態学調査、琵琶湖周辺の暮らしや文化に関わる調査を継続して行い、本研究プロジェクトのなかで成果をとりまとめるとともに、次のプロジェクトで継続・発展させるべき課題を明らかにする。

⑤行政主体との連携(東近江市等)

東近江市では「鈴鹿の森づくり構想」の検討会が立ち上がり、新たな森林環境税と「森林経営管理法(仮)」の枠組みを想定した持続可能な森林管理のあり方を検討しつつあるが、本センター長が座長を務めるなど、政策提言に向けた積極的な関わりを進めており、上記の「東近江フットパスプロジェクト」とともに、研究最終年には具体的成果が期待される。また、琵琶湖水域圏全体の課題を明らかにし、「琵琶湖保全再生法」の理念に資する提言を行う。

<自己評価の実施結果および対応状況>

自己評価は各種の研究会および各年度の成果報告の場でもある研究センター主催の公開シンポジウムで、兼任研究員およびプロジェクト参加院生・学生、外部の有識者がそれぞれ成果報告・発表を行い、研究手法や結果について相互に指摘し合いながら相互評価、改善活動を恒常的に行っている。それらの成果は、各研究員の個別の研究成果とともに、年次報告書としてまとめ、発行し、研究班長およびユニット長が各年度の達成状況の確認を行っている。

学術論文	図書	学会報告	研究会(学内開催)
47	9	23	24

上記のように、自己評価結果としては、当初の計画に従い着実に研究を進めており、特に文理連携の研究に基づく図書の出版など、成果物を公表できていると判断している。

<外部(第三者)評価の実施結果および対応状況>

本学の特色ある研究活動を総合的にカバーする「人間・科学・宗教総合研究センター」では、学外者を含む外部評価委員を組織し、評価を実施することを内規で定めている。本プロジェクトは2017年度(2017年6月)に、本中間審査と同様の様式で作成した成果報告書およびヒアリング(90分)をもとに、3名の外部評価委員による評価(各項目5点満点)を受けた。

外部評価結果 2017年6月15日実施

評価項目	J委員	K委員	L委員	平均
①研究計画の妥当性	4	4	5	4.33
②研究進捗状況	4	4	4	4.00
③研究体制	4	4	4	4.00
④研究業績	3	3	5	3.66
合計	15	15	18	4.00

以上のように、外部有識者による評価は本プロジェクトの着実な進捗を高く評価するものであり、本学としても引き続き、強みのある研究として推進することを決定した。特に大きな評価を受けた、「龍谷の森」を中心とした森林管理・研究・教育・地域連携と、文理連携の横串を指す研究成果による知見の形成については、国内外の研究機関および行政主体との連携を踏まえて、さらなる成果につなげていくことを予定している。改善点として指摘された研究者間の共通プラットフォームの形成については、今後、議論を進めるとともに、相互の情報交換を今以上に深めることを確認した。これらの点は、最終年度の「琵琶湖イニシアティブ」の提言に向けてより一層進展させていく予定である。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1)琵琶湖水域圏 (2)Satoyama モデル (3)琵琶湖イニシアティブ
 (4)文理融合 (5)生物多様性 (6)バイオマス
 (7)里山 (8)環境・社会政策

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

1. Furuhashi T, Nakamura T, Iwase K. Analysis of metabolites in stem parasitic plant interactions: Interaction of Cuscuta-Momordica versus Cassytha-Ipomoea. *Plants* 5:43.2016. 査読有
2. 岩瀬剛二・乙幡奨平、西表島の海岸植物の多様性、帝京科学大学紀要 12:57-74. 2016、査読有
3. Sawabe K, Natuhara Y. Extensive distribution models of the harvest mouse (*Micromys minutus*) in different landscapes. *Global Ecology and Conservation* 8. 2016年10月. 108-115. 査読有
4. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Y. Natuhara. Animal or algal materials: food toughness, food concentration and competitor density influence food choice in an omnivorous tadpole. *Herpetologica* 72. 2016年7月. 114-119. 査読有
5. Ramamonjisoa N, Iwai N, Natuhara Y. Post-metamorphic costs of larval animal diet in an omnivorous tadpole. *Copeia* 104. 2016年11月. 808-815. 査読有
6. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Natuhara Y. Food preference in relation to food protein content and toughness in a pond dwelling tadpole. *Journal of Herpetology* 51. 2017年3月. 47-51. 査読有
7. Ramamonjisoa N, Natuhara Y. Hierarchical competitive ability and phenotypic investment in preys: inferior competitors compete and defend. *Journal of Zoology* doi: 10.1111/jzo. 12406. 2016年10月. 査読有
8. 高橋佳孝・井上雅仁、三瓶山ススキ草地の種多様性を指標する植物種の抽出、島根県立三瓶自然館研究報告 15:13-19、2017年3月31日(印刷中)、2017、査読無
9. 大谷一郎・高橋佳孝・堤 道生、ススキ(*Miscanthus sinensis* Anderss.)の導入方法の違いがススキの定着ならびに植生に及ぼす影響、日本草地学会誌 62:75-78、2016、査読有
10. 高桑 進、杉が21世紀の日本を救う、国際いけ花学会論文集、2017
11. Takashi Yamamoto, Hiroyoshi Kohno, Akira Mizutani, Ken Yoda, Sakiko Matsumoto, Ryo Kawabe, Shinichi Watanabe, Nariko Oka, Katsufumi Sato, Maki Yamamoto, Hisashi Sugawa, Kiyotaka Karino, Kozue Shiomi, Yoshinari Yonehara and Akinori Takahashi. Geographical variation in body size of pelagic seabird, the streaked shearwater *Calonectris leucomelas*. *Journal of Biogeography* (J. Biogeogr.) 43. 801-808. 2016
12. 須川 恒、京都府・冠島のオオミズナギドリの巣穴数の35年後の変化、ALULA (No. 52, 2016 春号): 26-30、2016
13. 須川 恒、大阪バードフェスティバル 2015『カラーマーキング調査が開く野鳥の世界』ブース展示報告、ALULA (No.52, 2016 春号): 43-51、2016
14. 須川 恒、ツバメの集団ねぐらを通してヨシ原を守る、野鳥、2016年7月号、No.806:16
15. 須川 恒、ツバメの渡りと集団ねぐら、ソングポスト、201(2016年8-9月号):16-18、2016
16. 須川 恒、いのちの森と京都の自然、いのちの森 No.20:61-63、京都ビオトープ研究会、2016
17. 須川 恒・狩野清貴、京都府冠島におけるオオミズナギドリ 現状と課題、月刊海洋9月号(オオミズナギドリ特集号(上)):409-414、2016
18. 須川 恒、湖北地方で越冬する亜種オオヒシクイの繁殖地の探求(特集巻頭エッセイ)、み～な、vol. 129:2-3、2016
19. Maruyama, A., Tanahashi, E., Hirayama, T., and Yonekura, R., "A comparison of changes in stable isotope ratios in the epidermal mucus and muscle tissue of slow-growing adult catfish", *Ecology*

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- of Freshwater Fish. 26 : pp636-642(2017),査読付
20. Shigeta, K., Tsuma, S., Yonekura, R, Kakamu H., Maruyama, A., “Isotopic analysis of epidermal mucus in freshwater fishes can reveal short-time diet variations”, Ecological Research . 32 : pp633-641(2017),査読付
 21. Iwai, N.*, Koyama, N.*, Tsuji, S.*, Maruyama, A.*, “Functions of indigenous animals in paddy fields: An in situ experiment on their effects on water quality, phytoplankton, weeds, soil structure, and rice growth”, Paddy and Water Environment. In press., 査読付 *: equal contribution.
 22. 神松幸弘・富田晋介・丸山 敦・船津耕平・門司和彦, “メコン川下流水田域における生業、土地利用、生態系サービス:水位変動下における適応”, 環太平洋文明研究. 1 : pp69-92(2017)、査読付
 23. 西大嵩樹・丸山 敦, “ニジマスの採餌応答に見られるルアー色と濁度の交互作用”, 魚類学雑誌, 64(2)、印刷中(2017)、査読付
 24. 今村彰生・橋本果穂・丸山 敦, “2015 年夏季に琵琶湖北西岸で捕獲された魚食性絶滅危惧魚種ハス (*Opsariichthys uncirostris uncirostris*) の空腸率と体型について”, 伊豆沼・内沼研究報告、(2017)、査読付
 25. 沢田 隼・米倉竜次・丸山 敦, “アユの炭素, 窒素安定同位体比分析のための脂質量補正式と筋肉, 卵巣, 粘液における濃縮係数”, 魚類学雑誌. 65(1)、印刷中(2018)、査読付
 26. Sato H, Sogo Y, Doi H, Yamanaka H , “Usefulness and limitations of sample pooling for environmental DNA metabarcoding of freshwater fish communities”, Scientific Reports Vol.7 pp14860(1 Nov 2017)、査読付
 27. 秋山道雄, “ラムサール条約湿地としての琵琶湖—登録が果たした機能を中心に—”, 『地理科学』Vol. 72, No. 3, pp. 166-181(2017 年 10 月)、査読付
 28. Watanabe, S., Kaneko, Y., Maesako, Y., Noma, N. , “Detecting the early genetic effects of habitat degradation in small size remnant populations of *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. (Lauraceae) ”, International Journal of Forestry Research Volume 2017: pp1-7.(2017 年 3 月), 査読付
 29. 神松幸弘・丸山 敦, “変態の遅延するモリアオガエル (*Rhacophorus arboreus*) 幼生の観察および炭素・窒素安定同位体分析による生態的地位の推定”, 爬虫両棲類学会誌. 2017(1):pp30-36 (2017)
 30. 遊磨正秀 編, “ホテル関連文献目録 2016 年版”, 全国ホテル研究会. 297 pp(2017)
 31. 遊磨正秀, “総説動植物に対する「光害」, 特にホテル類への影響”, 全国ホテル研究会誌 50 : pp25-40(2017)
 32. *27 秋山道雄, “分水嶺にきていた工業用水問題の分析”, 『水資源・環境研究』Vol. 30, No. 2, pp. 25-26(2017 年 12 月)
 33. 須川 恒, “北の国からの来訪者—オオミズナギドリ・ユリカモメ・コクガン—”, ALULA(No.54,2017 春号): pp36-42(2017)
 34. 須川 恒, “ユリカモメのカラーリング調査は世界を結ぶ—大阪自然史フェス 2016 ブース展示報告—”, ALULA(No.54,2017 春号): pp43-48(2017)
 35. 高橋佳孝, “阿蘇草原の自然再生と草資源の堆肥利用”, GREEN AGE 2017 年 7 月号 pp30-33 (2017 年 7 月 15 日)
 36. 高橋佳孝, “風景を語る 第 1 回高橋佳孝氏(阿蘇草原再生協議会会長)”, 文化的景観だより(阿蘇都市世界文化遺産登録事業推進協議会事務局(阿蘇世界文化遺産推進室))1 号 pp3 (2017 年 3 月)
 37. *15 林珠乃(2016)「大津市瀬田・田上地区の景観」龍谷理工ジャーナル 28 巻 1 号(pp.1-6)
 38. Furuhashi T, Nakamura T, Iwase K. Analysis of metabolites in stem parasitic plant interactions: Interaction of *Cuscuta*-*Momordica* versus *Cassytha*-*Ipomoea*. Plants 5:43. 2016.
 39. 岩瀬剛二・乙幡奨平、西表島の海岸植物の多様性、帝京科学大学紀要 12:57-74. 2016
 40. Sawabe K, Natuhara Y. Extensive distribution models of the harvest mouse (*Micromys minutus*) in different landscapes. Global Ecology and Conservation 8. 2016 年 10 月. 108-115.

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

41. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Y. Natuhara. Animal or algal materials: food toughness, food concentration and competitor density influence food choice in an omnivorous tadpole. *Herpetologica* 72. 2016年7月. 114-119.
42. Ramamonjisoa N, Iwai N, Natuhara Y. Post-metamorphic costs of larval animal diet in an omnivorous tadpole. *Copeia* 104. 2016年11月. 808-815.
43. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Natuhara Y. (2017年3月) Food preference in relation to food protein content and toughness in a pond dwelling tadpole. *Journal of Herpetology* 51. 47-51.
44. Ramamonjisoa N, Natuhara Y. (2016年10月) Hierarchical competitive ability and phenotypic investment in preys: inferior competitors compete and defend. *Journal of Zoology* doi: 10.1111/jzo. 12406.
45. 高橋佳孝・井上雅仁(2017年3月31日)、三瓶山ススキ草地の種多様性を指標する植物種の抽出、島根県立三瓶自然館研究報告 15:13-19
46. 大谷一郎・高橋佳孝・堤道生(2016)、ススキ(*Miscanthus sinensis* Anderss.)の導入方法の違いがススキの定着ならびに植生に及ぼす影響、日本草地学会誌 62:75-78
47. Takashi Yamamoto, Hiroyoshi Kohno, Akira Mizutani, Ken Yoda, Sakiko Matsumoto, Ryo Kawabe, Shinichi Watanabe, Nariko Oka, Katsufumi Sato, Maki Yamamoto, Hisashi Sugawa, Kiyotaka Karino, Kozue Shiomi, Yoshinari Yonehara and Akinori Takahashi. Geographical variation in body size of pelagic seabird, the streaked shearwater *Calonectris leucomelas*. *Journal of Biogeography* (J. Biogeogr.) 43. 801-808. 2016

<図書>

1. *25 牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子、「琵琶湖水域圏の可能性—里山学からの展望」、晃洋書房、2018年3月30日
2. *14 宮浦富保、「植物間の競合：種間競争、種内競争」、造林学第四版(丹下健・小池孝良編)、朝倉書店、84-91、2016
3. 高橋佳孝、阿蘇の草原「阿蘇の文化的景観」保存調査報告書 II：詳細調査。(阿蘇世界文化遺産推進室編)、阿蘇市・南小国町・小国町・産山村・高森町・南阿蘇村・西原村、阿蘇、p159-210、2016
4. Takahashi Y, Neef A, Yokogawa H. Conservation and restoration of traditional grasslands in the Mount Aso region of Kyushu, Japan—The role of collaborative management and public policy support—. *Shifting Cultivation Policies: Balancing Environmental and Social Sustainability* (Cairns M ed.). Centre for Agriculture and Biosciences International (CABI), Oxfordshire.. 2017
5. *27 西野麻知子・秋山道雄・中島拓男(編)『琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点』、サンライズ出版 pp. 248(2017年10月5日)
6. *27 橋本啓史・須川恒、「第7章 水鳥の現状とその変遷—価値ある湖岸湿地保全のために」、西野麻知子・秋山道雄・中島拓男(編)『琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点』(pp248)、サンライズ出版 pp176-193(うち 7-1, 7-4 は須川・橋本)
7. 須川 恒・橋本啓史、「7-14 水鳥」、琵琶湖ハンドブック三訂検討チーム会議(編)『琵琶湖ハンドブック三訂版』、滋賀県琵琶湖環境部環境政策課(2018 予定)
8. Yositaka Takahashi, Andreas Neef, Hiroshi Yokogawa, “Conservation and Restoration of Traditional Grasslands in the Mount Aso Region of Kyushu, Japan—The role of collaborative management and public policy support—”, *Shifting Cultivation Policies: Balancing Environmental and Social Sustainability* (Cairns M ed.). Centre for Agriculture and Biosciences International (CABI), pp174-192(2017年11月)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

9. 横川 洋・高橋佳孝(共編著)、“阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス—文化的景観論で地域価値を再発見し世界文化遺産登録を支援する—”、農林統計出版 pp1-378(2017年4月11日)

<学会発表>

1. *26 秋山道雄・小野奈々・平山奈央子・中村公人・橋本慧子・皆川明子、「愛知川流域圏における水利システムの特性と課題」、水資源・環境学会大会、2016年6月4日、法政大学
2. 秋山道雄、「琵琶湖研究の経験からみた湿地のワイズユース」、地理科学学会秋季学術大会シンポジウム「湿地のワイズユースを考える—自然の保護と活用を巡る諸問題—」、2016年11月26日、広島大学
3. Iwase, K., Oppata, S., Tajima, H., Furuhashi, T., Terashima, Y. Ecological characteristics of coastal parasitic vine, *Cassytha filiformis* in Yaeyama Islands. 9th International Symposium Exploring the Global Sustainability—Advances in Plant Biotechnology for Agriculture in Semiarid Land, Suita, 2016
4. *6 奥田史郎・山下直子・中尾勝洋・諏訪鍊平・田中真哉・高橋裕史・加藤顕・宮浦富保、「滋賀県落葉広葉樹二次林に優占するコナラの用途別材積の推定」、第128回日本森林学会大会ポスター発表、2017年3月28日
5. 隅田明洋・渡辺力・宮浦富保、「ヒノキ個体群の樹冠の枯れ上がりを決める気象要因」、第64回日本生態学会ポスター発表、2017年3月16日
6. 新谷涼介・福島和也・宮浦富保、「コナラ二次林における土壌深度の変化に伴う微生物呼吸量の推移—IRGAとソーダライムを用いた測定事例—」、第64回日本生態学会ポスター発表、2017年3月15日
7. 井上雅仁・高橋佳孝、島根県三瓶山麓の刈り取り草原における絶滅危惧植物スズサイコの動態、第64回日本生態学会大会、2017、東京
8. 増井太樹・横川昌史・高橋佳孝・津田 智、熊本県阿蘇地域における斜面崩壊後の草原植生の回復、第64回日本生態学会大会、2017、東京
9. 橋本啓史・中村進・須川恒、京都市の復元型ビオトープ「いのちの森」における20年間の鳥類の記録、日本鳥学会大会、ポスター発表、2016年9月1日、北海道大学(札幌市)
10. 須川 恒、大阪自然史フェスティバル2016におけるユリカモメのカラーリング調査、日本鳥類標識協会2016年度大会、2016年12月24日、市川市南行徳市民センター
11. 鶴谷峻之・遊磨正秀、“アジメドジョウの摂餌生態と付着藻類をめぐる種間関係”、第65回日本生態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)(2018年3月)
12. 野村将一郎・遊磨正秀、“琵琶湖沿岸部におけるオオクチバス稚魚の食性”、第65回日本生219研究活動報告態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)(2018年3月)
13. 沢田 隼・藤原壮平・遊磨正秀・丸山敦、“琵琶湖水系に陸封されたアユの安定同位体比からわかること～異なる時間スケールの食性を示す複数組織を組み合わせて～”、第65回日本生態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)
14. *27 秋山道雄、“琵琶湖保全再生計画の位相—琵琶湖総結後20年間の堆積と変容をめぐって—”、水資源・環境学会2017年度研究大会(大阪府茨木市)(2017年6月3日)
15. 須川 恒、“京都府冠島におけるオオミズナギドリの生残率推定”、(ポスター発表)日本鳥学会大会(つくば市、筑波大学)(2017年9月17日)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

16. 横川昌史・井上雅仁・堤 道生・白川勝信・高橋佳孝、“熊本県阿蘇東外輪山における草原再生に伴う7年間の植生の変化”、植生学会第22回大会沖縄大会(那覇市)(2017年10月22日)
17. 川上将樹・篠原耕平・大塚泰介・Bosco Rusuwa・遊磨正秀・丸山敦(2016/9/24-25) マラウイ湖に生息するシクリッド魚類の摂食行動と食性分析から見えるニッチの柔軟性. 日本魚類学会(ポスター発表), 岐阜大学, 岐阜市
18. 武村達也・豊福晋作・遊磨正秀(2015/9/29) 河川におけるオイカワ(*Zacco platypus*)の行動と河川内分布. 日本陸水学会第80回大会, 北海道大学函館キャンパス, ポスター発表
19. 東郷有城・遊磨正秀(2015/9/4) 異なる森林環境におけるガ類の食性分類群による環境応答. 環境アセスメント学会 第14回大会, ポスター, 龍谷大学, 大津市. (ポスター賞)
20. 山田純平・遊磨正秀(2016/3/27) 開花植物の多様性が訪花昆虫群集の多様性に与える影響. 日本昆虫学会第76回大会・第60回日本応用動物昆虫学会大会合同大会, 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス, 堺市
21. 豊福晋作・武村達也・遊磨正秀(2016/3/22) ゲンジボタル(*Lucioka cruciata*)とヘイケボタル(*L. lateralis*)の樹木利用. 第63回日本生態学会, 仙台市(ポスター発表)
22. *26 野村賢吾・鶴谷峻之・遊磨正秀(2017/3/16) 農業用水路におけるイシガイ類の生息環境. 第64回日本生態学会大会, 早稲田大学, 東京都新宿区.
23. *6 奥田史郎・山下直子・中尾勝洋・諏訪錬平・田中真哉・高橋裕史・加藤顕・宮浦富保、滋賀県落葉広葉樹二次林に優占するコナラの用途別材積の推定、第128回日本森林学会大会ポスター発表、2017年3月28日

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
ホームページで公開している場合には、URLを記載してください。

<既に実施しているもの>

●シンポジウム

1. *23 2015年度シンポジウム『琵琶湖の保全再生と里山・里湖 一人と水との共生にむけてー』

開催日: 2016年3月5日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第一部

主催者挨拶

牛尾 洋也 (龍谷大学里山学研究センター長・法学部教授)

滋賀県知事ご挨拶

三日月大造(滋賀県知事)

オープニング

太田 真人(龍谷大学里山学研究センター博士研究員)

西脇秀一郎

(龍谷大学里山学研究センターRA・龍谷大学大学院法学研究科博士後期課程)

佐々知紗理(龍谷大学法学部2回生)

基調講演「文理連携をめざす環境研究者の理想を

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

いかに政策実践にむすびつけたのか？

—琵琶湖研究40年・滋賀県知事8年の経験から—

嘉田由紀子(びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事)

関連講演「琵琶湖の課題と琵琶湖保全再生法の制定」

岡田 英基(滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課琵琶保全再生室長)

龍谷大学里山学研究センターの取り組み紹介

①センターの全体構成:

牛尾 洋也(龍谷大学里山学研究センター長・法学部教授)

「里山学研究センター新プロジェクト構想について」

*1②第1班「水と生命」班:

山中 裕樹(龍谷大学里山学研究センター研究員・理工学部講師)

「汲んだ水から生物調査—DNA分析による水棲生物の分布推定—」

*14③第2班「資源と産業」班:

宮浦 富保(龍谷大学里山学研究センター研究員・理工学部教授)

「里山の食とエネルギー」

*15④第3班「人と暮らし」班:

林 珠乃(龍谷大学里山学研究センター研究員・理工学部助手)

「琵琶湖水域圏の景観のみかた」

第二部

ポスターセッション「里山・里湖にかかわる多様な研究・取り組みのポスター展示」

・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センターの紹介」

*15・林 珠乃、「琵琶湖水域圏の景観を読み解く外的な視点と内的な視点」

*14・谷垣岳人、「里山環境教育の実践:里山学研究センターの取り組み①」

*14・谷垣岳人、「里山環境教育の実践:里山学研究センターの取り組み②」

*5・高桑進、「環境教育プログラムとしての炭火焼き活動の展開と

炭焼きマイスター制度の普及について:

「里山の保全」「二酸化炭素の削減」「防災燃料の確保を目指して」

*2・中川晃成、「大縮尺空中写真でみる琵琶湖岸の景観変遷」

*14・猪谷富雄、「イネの多様性と水田保持策の研究」

*7・占部武生、「薪ストーブ燃焼ガスの触媒によるクリーン化に関する研究」

・伊達浩憲、「東日本大震災で壊滅的打撃を受けた岩手県陸前高田市の
エゾイシカゲガイ養殖 ～漁師たちとの交流～」

・伊達浩憲、「東日本大震災で壊滅的打撃を受けた岩手県陸前高田市の
畦畔茶園の再生」

・伊達浩憲、「京都府唯一の村・南山城の茶業振興をめざし龍谷大学オリジナル
宇治茶『雫』を開発・栽培・販売」

・須川恒、「ラムサール条約を生かした湿地保全活動—世界湿地の日 in 湖北—」

*6・野間直彦・渡部俊太郎・今城克啓・金子有子・前迫ゆり・嘉田由紀子、
「伐採の危機に瀕する琵琶湖源流域のトチノキ巨木林」

*26・遊磨正秀・丸山 敦・山中裕樹・太田真人、

「琵琶湖の回遊魚と流入河川の河口付近環境」

・太田真人・東郷有城・遊磨正秀、「景観の違いから見たチョウ類と捕食者の関係」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・東郷有城・太田真人・遊磨正秀、
「森林環境が食性によって分類されたガ類の群集構造に及ぼす影響」
- ・武村達也・豊福晋作・太田真人・遊磨正秀、
「河川におけるオイカワ(Zacco platypus)の休息及び摂餌行動と河川内分布」
- ・豊福晋作・武村達也・太田真人・遊磨正秀、
「滋賀県田上地域における水路草本環境とゲンジボタル成虫の増減」
- ・山田純平・太田真人・遊磨正秀、
「里山の開花植物の多様性が訪花昆虫群集の多様性に与える影響」
- ・野村賢吾・太田真人・遊磨正秀、
「農業用水路におけるイシガイ類の体長別生息環境」
- ・鶴谷峻之・武村達也・太田真人・遊磨正秀、
「河川におけるアジメドジョウの行動と河床環境利用」
- *1・本郷真理・山中裕樹・加納光樹・苅部甚一、
「環境 DNA 分析によるチャネルキャットフィッシュ検出系の確立」
- *1・垣見直希・河野吉将・山中裕樹、
「魚類由来の環境 RNA 回収～抽出手法と放出後の動態について～」
- ・谷口雅治、「重要文化的景観とは～水の利用とくらし～」
- *10・稲葉大輔、「世界農業遺産」
- ・眞田章午・西脇秀一郎、
「琵琶湖集水域における公私協働の構築—琵琶湖疏水と琵琶湖保全再生法—」

第三部

パネルディスカッション「琵琶湖水域圏における人と水との共生にむけて」

コーディネーター:

牛尾 洋也(里山学研究センター長・龍谷大学法学部教授)

パネリスト:

嘉田由紀子(びわこ成蹊スポーツ大学学長、前滋賀県知事)

大崎 康文(滋賀県観光交流局副主幹)

山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課 課長補佐)

秋山 道雄(龍谷大学里山学研究センター研究員・滋賀県立大学名誉教授)

山中 裕樹(龍谷大学里山学研究センター研究員・理工学部講師)

村澤真保呂(龍谷大学里山学研究センター研究員・社会学部准教授)

エンディング

太田 真人(龍谷大学里山学研究センター博士研究員)

西脇秀一郎

(龍谷大学里山学研究センターRA・龍谷大学大学院法学研究科博士後期課程)

谷口 雅治(龍谷大学法学部4回生)

閉会挨拶

田中 滋(龍谷大学里山学研究センター研究員・社会学部教授)

2. *20 2016 年度シンポジウム『流域のくらしと奥山・里山 ～愛知川から考える～』

開催日: 2017年3月4日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

講演内容:

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也 (龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長)

*26 基調講演 1「なぜ愛知川流域を研究するか—琵琶湖の健全な「乳母」であるために—」

田中 滋 (龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・研究員)

*3 基調講演 2「東近江市の流域政策」

山口美知子 (東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)

第二部

ポスターセッション「里山・里湖にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

・里山学研究センターの紹介

*15・林珠乃、「景観生態学的に見た琵琶湖・瀬田川流入河川の集水域の特徴」

*16・林珠乃、「明治初期の愛知郡・神崎郡・蒲生郡における自然と人々の暮らし—滋賀県物産誌から読み解く身近な自然と共に生きる姿—」

*2・中川晃成、「大縮尺空中写真でみる湖と森をむすぶ景観諸相」

*1・本澤大生・小松鷹介・山中裕樹、

「環境 DNA 分析を用いた琵琶湖・浜名湖周辺における

特定外来生物ヌートリアの侵入初期探知」

*1・芝田直樹・辻冨月・佐藤博俊・山中裕樹、

「環境 DNA 分析と直接捕獲から得た河川棲魚類相調査結果の比較」

・須川恒・野村祐美子・植田潤、

「世界湿地の日 2017in 湖北『湿地と防災/減災・河川と流域へのまなざし』」

・遊林会事務局、「この河辺林はなぜ残ったか?～里山保全活動 19 年の歩み～」

・嶋田可菜・岡野大樹・古太恵人・浦諒太郎・山本竜平、「食の循環から見る農業」

・管野優香・野間元綺・石田聡子・中原広貴、

「公害から地域再生へ～そのプロセスとは～」

・吹野僚平・藤坂妃那・井上優大・今西徹、

「日本遺産～信濃川流域に生き続ける縄文文化～」

*10・米住京子・由良康太・山本英樹・西元康宏・安達弘暉、

「佐渡の世界農業遺産と生物多様性」

*10・鎌野有紀・細川晋大・佐々知紗理、

「世界農業遺産みなべ・田辺の梅システムと生物多様性」

*26・遊磨正秀・太田真人、「愛知川における河床高の変動」

*26・太田真人・遊磨正秀、「「河辺いきものの森」のチョウ類相」

・山田純平・野村賢吾・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、

「龍谷の森の林内植生環境と訪花昆虫」

・鶴谷峻之・野村賢吾・山田純平・太田真人・遊磨正秀、

「河川上流部におけるアジメドジョウの行動と河床利用」

・野村賢吾・鶴谷峻之・山田純平・太田真人・遊磨正秀、

「マツカサガイの成長段階に応じた生息環境」

・野口聡・太田真人・遊磨正秀、「ヤマトシジミの蜜源植物に対する選好性」

・磯谷一毅・太田真人・遊磨正秀、「森林における土壌動物と植生の関係」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・澤田司・太田真人・山田純平・野村賢吾・鶴谷峻行・遊磨正秀、
「畦畔の環境変化がカエル類の食性に与える影響」
- ・館雄大・太田真人・遊磨正秀、
「龍谷大学瀬田キャンパスにおけるセアカゴケグモの生息環境による卵数変動」
- ・野田葵・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、「カジカ大卵型の体色と底質の色彩」
- ・山田直輝・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、
「底生魚カマツカが選択する河床環境」
- ・山鳥将弥・太田真人・遊磨正秀、「アカハライモリの利用環境と移動範囲」

第三部

*18 関連講演 1「小椋谷と木地屋」

須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

*8 関連講演 2「東近江市 里山林整備の現場から」

松尾扶美(東近江市永源寺森林組合・技術職員)

*6 関連講演 3「東近江の森林資源～特徴と利用可能性」

山下直子(国立研究開発法人森林総合研究所・主任研究員)

第四部

パネルディスカッション「森・川・湖の統合的な流域政策へ」

コーディネーター:

宮浦富保(龍谷大学理工学部・教授/里山学研究センター・副センター長)

パネリスト:

山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)

須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

松尾扶美(東近江市永源寺森林組合・技術職員)

山下直子(国立研究開発法人森林総合研究所・主任研究員)

田中 滋(龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・研究員)

林 珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員)

閉会挨拶

丸山徳次(龍谷大学文学部・教授/里山学研究センター・研究員)

3. *24 2017 年度シンポジウム『里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～』

開催日: 2018 年 3 月 3 日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第〇部・第二部

ポスターセッション「里山・里湖にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センター紹介」

*15・林珠乃、「明治初期の滋賀県における災害の状況」

*2・中川晃成、「愛知川流域とその周辺の地形・水系・条里」

*2・中川晃成・吉田天斗・井上康裕、「琵琶湖水位の 150 年」

*2・中川晃成、「淀川三川合流地点の水理－宇治川・木津川・桂川の流量と水位－」

*1・渡邊和希・佐藤博俊・本郷真理・本澤大生・櫻井翔・山中裕樹、

「環境 DNA 分析によるニホンウナギの野外検出およびモニタリング」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・須川恒、「カワウ問題解決の順応的管理と河川環境改善」
- *7・高桑進・松村賢治、
「里山の未利用バイオマスを活用する新しい炭焼きの取組み」
- *9・野間直彦・小崎和樹・稗田真也・石田未基・森小夜子・渡部俊太郎・高柳敦、
「伊吹山頂草原植物群落(天然記念物)のシカ食害からの保全」
- ・稗田真也・栗林実・森小夜子・野間直彦、
「琵琶湖の水辺の絶滅危惧植物ホットスポットおよび侵略的外来植物の研究」
- *6・渡部俊太郎・高倉耕一・金子有子・前迫ゆり・野間直彦・西田隆義、
「琵琶湖周辺のタブノキ林ー由来と生態と保全ー」
- *1・丸山敦・麻田弥希・高田恭輔・渡邊和希・佐藤博俊・米倉竜次・山中裕樹、
「環境 DNA メタバーコーディングで農業排水路網の魚類の分布を明らかにする」
- *1・丸山敦・菅谷紘佑・山中裕樹・今村彰生、
「環境 DNA を用いた絶滅危惧魚ハスの繁殖遡上の定量的調査」
- ・丸山敦・村潤市郎・神松幸弘・入口敦志、
「古書籍に漉き混まれた毛髪の安定同位体分析による近世の庶民の
食生活の推定」
- ・太田真人・鶴谷峻之・野村賢吾・遊磨正秀、
「トカゲが選ぶのは大きな翅の蝶か大きな胸の蝶かー蝶翅上捕食痕からみるー」
- *26・野村賢吾・鶴谷峻之・野村将一郎・吉村理・太田真人・遊磨正秀、
「農業用水路の環境がイシガイ類の成長に与える影響」
- ・鶴谷峻之・野村賢吾・野村将一郎・吉村理・太田真人・遊磨正秀、
「野洲川支流田村川におけるアジメドジョウの摂餌生態と種間関係」
- ・吉村理・野村将一郎・鶴谷峻之・野村賢吾・太田真人・遊磨正秀、
「市街地二次植生におけるクチベニマイマイの好適環境」
- ・野村将一郎・鶴谷峻之・野村賢吾・吉村理・太田真人・遊磨正秀、
「オオクチバス稚魚の食性(魚食への挑戦)」
- *27・浅海一暉・井上滉平・大下智輝・金本さくら・川端日菜々・河野拓海・小松右
詩・清水莉子・辻井宏佑・外山由利菜・濱田直幸・藤本和・松崎里歩・松元彰汰・
横山智恵・清水万由子、
「人心あれば水心ありー琵琶湖流域における人と水の関わりマップの制作ー」
- *22・安田奈於、「フットパスとは？」
- ・由良康太、「フットパス始まりの地イギリス」
- ・澤村奈叶、「花のまち 恵庭市」
- ・澤村奈叶、「北海道 黒松内町のフットパスの魅力」
- ・吹野僚平、「里地里山を魅せる～小野路の昔ながらの景観を歩く～」
- ・湯川希、「山梨県のフットパス」
- ・本田大輝、「歩くことで観える景色がある～美里町編～」
- *22・由良康太、「日本におけるフットパス 各調査先のまとめ」
- *22・米住京子、「魅力あふれる自然豊かなまち 東近江市」
- *22・山本英樹、「歴史感じる商人のまち～五個荘～」
- *22・野間元綺、「能登川の 水面に漂う 鷹の羽」
- ・中原広貴、「御代参街道と八風街道が交わる交通の要衝」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也 (龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長)

基調講演 1「日本人の伝統的自然観と治水のあり方」

大熊孝(新潟大学・名誉教授)

基調講演 2「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」

西田貴明(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社・副主任研究員)

第三部

関連講演 1「減災型治水システムの社会実装とその課題」

瀧健太郎(滋賀県立大学環境科学部・准教授)

*24 関連講演 2「里山開発と宅地災害—戦後日本の「遅れてきた公害」—」

釜井俊孝

(京都大学防災研究所斜面災害研究センター長 里山学研究センター・研究員)

*9 関連講演 3「奥山の自然は蝕まれている

～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか?」

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

第四部

パネルディスカッション「これからの防災・減災に求められること」

コーディネーター:

清水万由子(龍谷大学政策学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

パネリスト:

大熊孝(新潟大学・名誉教授)

西田貴明(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社・副主任研究員)

瀧健太郎(滋賀県立大学環境科学部・准教授)

釜井俊孝

(京都大学防災研究所斜面災害研究センター長 里山学研究センター・研究員)

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

閉会挨拶

丸山徳次(龍谷大学文学部・教授/里山学研究センター・研究員)

●研究会

1. 2015 年度第1回研究会

開催日: 2015 年 7 月 28 日

場 所: 深草学舎和顔館4階第3会議室

講演者: 夏原由博(名古屋大学大学院環境学研究科教授)

「パターンが決めるランドスケープの機能」

2. 2015 年度第2回研究会

開催日: 2015 年8月 31 日

場 所: west lake hotel 可以登楼会議室

*27 講演者: 秋山道雄(滋賀県立大学名誉教授 龍谷大学里山学研究センター)

「変貌する琵琶湖—沿岸域研究の経験から—」

3. 2015 年度第3回研究会

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

開催日：2015年9月10日

場 所：深草学舎和顔館4階第3会議室

講演者：深町加津枝(京都大学地球環境学堂准教授)

「琵琶湖湖岸の里山景観めぐり研究と今後の方向性」

大崎理沙(京都大学農学研究科大学院生)

「里山・里海ライフスタイルの被災時危機適応力に関する研究

－東日本大震災の事例から－」

4. 2015年度第4回研究会

開催日：2015年10月16日

場 所：瀬田学舎7号館環境実習室2

講演者：横山秀司(九州産業大学大学院フェロー教授)

「景観生態学的にみた琵琶湖集水域」

5. 2015年度第5回研究会

開催日：2016年1月21日

場 所：瀬田学舎7号館環境実習室2

講演者：林 珠乃(龍谷大学理工学部実験助手 里山学研究センター)

第三研究班「人と暮らし」ユニット5「自然調和型の住環境と防災」研究方針について

6. 2015年度第6回研究会

開催日：2016年1月22日

場 所：瀬田学舎7号館環境実習室2

*1 講演者：山中裕樹(龍谷大学理工学部講師 里山学研究センター)

「次世代シーケンサーによる環境DNA分析でできること：

里山里湖の生物相解析に向けた応用」

7. 2015年度第7回研究会

開催日：2016年2月19日

場 所：深草学舎和顔館4階第2会議室

*11 講演者：劉 璨(国家林業局経済発展研究センター主席研究員)

「中国の集団林権制度改革及びその関連政策の制度整備に関する研究」

8. 2016年度第1回研究会

開催日：2016年4月20日

場 所：瀬田学舎7号館環境実習室2

*2,15 講演者：中川晃成(龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員)

「琵琶湖、その湖際(みずぎわ)の景観変遷－それを願うのは誰か－」

林 珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員)

「地理情報システム(GIS)の基礎とその可能性」

9. 2016年度第2回研究会

開催日：2016年6月3日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

*23 講演者：大崎康文(滋賀県商工観光労働局観光交流局(滋賀県教育委員会事務局文化財保護課併任))

「水と暮らしの文化－日本遺産のとり組みについて－」

10. 2016年度第3回研究会

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

開催日：2016年6月9日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

***3 講演者：山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)**

「森林の現状と課題及び所有権の問題について」

11. 2016年度第4回研究会

開催日：2016年6月16日

場 所：深草学舎紫英館2階第1共同研究室

講演者：須川 恒(龍谷大学・非常勤講師・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

「琵琶湖とラムサール条約ー大きな湖で条約を活用するにはー」

須川 恒(龍谷大学・非常勤講師・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

「ラムサール条約を活かした湿地保全活動ー世界の湿地の日 in 湖北ー」

赤松喜和(龍谷大学大学院政策学研究所)・

金 紅実(龍谷大学政策学部・准教授/里山学研究センター・研究員)

「ラムサールシンポジウム 2016ー中海・宍道湖ーへの参加・報告」

12. 2016年度第5回研究会

開催日：2016年7月30日

場 所：深草学舎紫光館4階講義室 401

***7 講演者：小池浩一郎(島根大学生物資源科学部・教授)**

「木質バイオマス発電の現状と課題」

泊みゆき(NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク・理事長)

「日本における木質バイオマス利用の現状と課題」

13. 2016年度第6回研究会

開催日：2016年10月16日

場 所：瀬田学舎智光館地下1階ステューデントコモンズミーティングルーム

***19 講演者：筒井 正(浜松学院大学・非常勤講師)**

「庵村茨川に生まれてー森林文化再考」

須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

「木地師の活動と里村」

14. 2016年度第7回研究会

開催日：2016年10月24日

場 所：瀬田学舎智光館地下1階ステューデントコモンズミーティングルーム

***21 講演者：Bosco Rusuwa(マラウイ大学チャンセラール校生物学科)**

「マラウイ湖の水産業と暮らし」

丸山 敦(龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員)

「マラウイ湖と琵琶湖の比較を考える」

15. 2016年度第8回研究会

開催日：2016年11月4日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

***23 講演者：岡田英基(滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課・課長)**

「琵琶湖保全再生施策に関する計画」の検討状況について」

16. 2016年度第9回研究会

開催日：2016年12月1日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

場 所： 深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

***24 講演者： 釜井俊孝(京都大学防災研究所・斜面災害研究センター長)**

「埋もれた都の防災学：都市と地盤災害の 2000 年」

17. 2016 年度特別研究会

開催日： 2017 年3月 22 日

場所： 深草学舎 22 号館4階会議室

***14 講演者： 池田恒男(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員)**

「日本民法によって捉えられるべき共同体的所有

—近代民法における「共有(広義)の諸形態」理論のパースペクティブに關説して—」

丸山徳次(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員)

「森のある大学」の里山学—「龍谷の森」の過去と未来—」

18. 2017 年度第1回研究会

開催日： 2017 年6月 24 日

場所： 深草学舎紫英館2階東第2会議室

***16 講演者： 林珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手里山学研究センター・研究員)**

「地理情報システム(GIS)による『滋賀県物産誌』の視覚化

—明治初期の滋賀県における産業と自然の様相—」

19. 2017 年度第2回研究会

開催日： 2017 年6月 27 日

場所： 深草学舎和顔館4階会議室2

講演者： 田井中慎(株式会社4CYCLE・代表取締役)

「カンボジアにおける野蚕エリサン養蚕事業 —持続可能な開発に向けた企業の取り組み—」

20. 2017 年度叢書合宿研究会

開催日： 2017 年9月 30 日-10 月1日

場所： 草津市立まちづくりセンター3階 308 号室(滋賀県草津市)

アーバンホテル草津会議室コスモス(滋賀県草津市)

***25 講演者： 吉岡祥充(龍谷大学法学部・教授里山学研究センター・研究員)**

「里山学から見る造林公社問題—「琵琶湖水域圏」を念頭において—」他 16 名

21. 2017 年度第3回研究会

開催日： 2017 年 11 月7日

場所： 瀬田学舎7号館環境実習室2

***21 講演者： 林珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手里山学研究センター・研究員)**

「マラウイ湖国立公園の森林資源の利用と保全」

太田真人(龍谷大学里山学研究センター・博士研究員)

「アフリカの里山—森林資源の利用と保全のバランス(植生調査報告)—」

22. 2017 年度第4回研究会

開催日： 2018 年2月 1日

場所： 深草学舎和顔館4階会議室3

***11 講演者： 劉璨(国家林業局経済発展研究センター・主席研究員)**

「中国の6大林業政策の現状と課題」

劉浩(国家林業局経済発展研究センター・副研究員)

「集団林権制度改革は森林保全のインセンティブになっているのか？」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

～住民アンケート調査から～

23. 2017 年度第5回研究会

開催日：2018 年2月6日

場所： 瀬田学舎1号館6階 619 会議室

*9 講演者： 西田貴明(三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社・副主任研究員)

「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授里山学研究センター・研究員)

「奥山の自然は蝕まれている ～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか？」

24. 2017 年度森林所有権制度研究会(共催)

開催日：2018 年3月9日

場所： 深草学舎 22 号館4階会議室

*13 講演者： 西脇秀一郎(龍谷大学里山学研究センター・リサーチ・アシスタント)

「共同地分割問題に関するドイツ団体法論(法人論)と入会理論」

古積健三郎(中央大学大学院法務研究科・教授)

「入会権と訴訟」

●ホームページによる研究成果の公表等

1. http://www.est.ryukoku.ac.jp/est/yuhma/YUMA_hotaruDAS2017.html

掲載情報の概要：里山学研究センターにおける京滋の里川におけるゲンジボタルの発生量の経年変化に関する研究について、所属研究室の web において公表した。(遊磨正秀)

公表日：2017 年 7 月

2. <http://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-982.html>

掲載情報の概要：政策学部「政策実践・探究演習(海外)」京丹後市にて有機栽培野菜の販売、絶滅危惧種ゲンゴロウ等を活かした「ゲンゴロウ米」収穫の実施報告を龍谷大学 HP において公開した。(金紅実・谷垣岳人)

公表日：2017 年 9 月 27 日

3. <http://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-1341.html>

掲載情報の概要：龍谷IP事業「政策実践・探究演習(海外)南京プログラム」の FD 報告会の開催報告を龍谷大学 HP において公開した。(金紅実・谷垣岳人)

公表日：2017 年 12 月 18 日

4. http://www.worldwetlandsday.org/display-event?p_p_id=eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet&p_p_lifecycle=0&p_p_state=maximized&p_p_mode=view&p_p_col_id=column-1&p_p_col_count=2&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_mvcPath=%2Fhtml%2Fevent%2Fdisplay%2Fview.jsp&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_redirect=%2Fmap&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_eventEntryId=4595

掲載情報の概要：以下のポスター資料などをラムサール条約事務局世界湿地の日 2017 のウェブサイト上で公開した。(須川恒)

ポスター発表資料詳細：須川恒・野村祐美子・植田潤、「世界湿地の日 2017in 湖北—湿地と防災/減災・河川と流域へのまなざし—」

公表日：2017 年 4 月

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

＜これから実施する予定のもの＞

1. 2018年度第1回研究会

開催日：2018年5月11日

場所：瀬田学舎7号館環境実習室2

講演者：林竜馬氏（琵琶湖博物館 学芸員）

「花粉分析から探る過去の植生と景観」

今後も、シンポジウム及び研究会を随時開催予定。

14 その他の研究成果等

「13 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付してください。

●年次報告書

1. 2015年度年次報告書里山学研究

『琵琶湖の保全再生と里山・里湖一人と水との共生にむけてー』

発行日：2016年3月31日

URL：<https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2017/02/2015.html>

*23【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

*27・嘉田由紀子、「文理連携をめざす環境研究者の理想をいかに政策実践にむすびつけたのか？
ー琵琶湖研究40年・滋賀県知事8年の経験からー」

*23・岡田英基、「琵琶湖の課題と琵琶湖保全再生法の制定」

*23・大崎康文、「日本遺産 琵琶湖とその水辺景観 ー祈りと暮らしの水遺産ー」

*3・山口美知子、「東近江市が目指す流域政策 ～森里川湖から始まる環境基本計画～」

*27・秋山道雄、「琵琶湖保全再生法の成立を受けて」

・村澤真保呂、「「こころ」と里山についての試論」

・牛尾洋也・嘉田由紀子・大崎康文・山口美知子・秋山道雄・山中裕樹・村澤真保呂、
「全体ディスカッション」

【2.研究会報告】

・夏原由博、「パターンが決めるランドスケープの機能」

*27・秋山道雄、「変貌する琵琶湖ー沿岸域研究の経験からー」

・深町加津枝、「琵琶湖湖岸の里山景観めぐり研究と今後の方向性」

・大崎理沙、

「岩手県三陸海岸地域南部における里山・里海ライフスタイルの被災時危機適応力
に関する研究」

・横山秀司、「景観生態学的にみた琵琶湖集水域」

*1・山中裕樹、「次世代シーケンサーによる環境DNA分析でできること」

里山里湖の生物相解析に向けた応用」

*11・劉璨、「中国の集団林権制度改革及びその関連政策の制度整備に関する研究」

【3.研究活動報告】

*14・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」

*27・西脇秀一郎・太田真人、「滋賀県高島市における重要文化的景観の現況」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

－重要文化的景観に関する研究調査報告－

*27・牛尾洋也・船越裕美・田中楓子・塩崎由香・吉見彩音、

「琵琶湖水域圏における重要文化的景観調査 その1 ー高島市大溝ー」

*11・谷垣岳人、「中国河北省承德市平泉県における集団林権改革後の

自然資源の利活用の調査報告」

*10・牛尾洋也、「世界農業遺産調査ー和歌山県『みなべ・田辺の梅システム』ー」

・西脇秀一郎、「京都弁護士会公害・環境委員会による里山実地修習

*14・林珠乃、「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」

・伊藤大輔・横田岳人、「龍谷の森」におけるササクサの分布と光環境について」

・井上なな・横田岳人、「収穫時期を逸したモウソウチクの食品化について」

・太田真人、「シンポジウム『琵琶湖・淀川の水質の現状と課題』について」

・太田真人、「シンポジウム『田んぼの生物多様性向上 10年プロジェクト交流会・琵琶湖』について」

・太田真人、「流域のこれからをみんなで考えるシンポジウム」について」

・西脇秀一郎、

「歴史まちづくり法の動向ー「近畿歴史まちづくりサミット in 京都」シンポジウム報告ー」

・西脇秀一郎、「適正な意思決定による災害復旧とまちづくり

ー「グリーンインフラと防潮堤問題」研究会報告ー」

・西脇秀一郎、「水の公共性から見る法と共同性

ー琵琶湖疏水「鴨川運河の魅力再発見」学術シンポジウムをうけてー」

・西脇秀一郎、「文化財(文化遺産)にかかわる法制度の一動向

ー「まち・ひと・こころかが織り成す京都遺産」制度創設記念シンポジウム報告ー」

【4.研究論文】

・高橋佳孝、「草原管理を反映する指標植物マニュアルの検証」

・岩瀬剛二・松永将幸、

「特定外来生物オオハンゴンソウの繁殖能力および効率的駆除方法の検討」

・江南和幸、「比叡山と琵琶湖の自然を巡る」

*2・中川晃成、「琵琶湖湖岸線の変遷ー烏丸半島とその周辺域の絵図、地図、空中写真ー」

*5・高桑 進、「炭焼きの科学と木炭の現代的利用」

*26・遊磨正秀・丸山 敦・山中裕樹・太田真人、「琵琶湖の回遊魚と流入河川の河口付近環境」

2. 2016年度年次報告書里山学研究『流域のくらしと奥山・里山 ～愛知川から考える～』

発行日：2017年3月31日

URL：<https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2017/06/2016.html>

*20【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

*26・田中滋、「なぜ愛知川流域を研究するか ー琵琶湖の健全な「乳母」であるためにー」

*3・山口美知子、「東近江市の流域政策」

*18・須藤護、「小椋谷と木地屋」

*8・松尾扶美「東近江市 里山林整備の現場から」

*6・山下直子「東近江の森林資源～特徴と利用可能性」

・宮浦富保・山口美知子・須藤護・松尾扶美・山下直子・田中滋・林珠乃、

「森・川・湖の統一的な流域政策へ」

【2.研究会報告】

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- *2・中川晃成、「琵琶湖、その湖際の景観変遷 —それを望むのは誰か—」
- *15・林珠乃、「地理情報システム(GIS)の基礎とその可能性」
- *23・大崎康文、「水と暮らしの文化 —日本遺産の取り組みについて—」
- *3・山口美知子、「森林の現状と課題及び所有権の問題について」
- ・須川恒、「ラムサールシンポジウム 2016 中海・宍道湖」参加のための事前学習会」
 - ・須川恒、「ラムサール条約を活かした湿地保全活動—世界湿地の日 in 湖北—」
 - ・赤松喜和・金紅実、「ラムサールシンポジウム 2016 中海・宍道湖への参加・報告」
- *7・小池浩一郎、「木質バイオマス発電と課題」
- *7・泊みゆき、「日本における木質バイオマス利用の現状と課題」
- *18・筒井正、「廃村茨川に生まれて —森林文化再考—」
- *18・須藤護、「木地師の活動と里村」
- *21・Bosco Rusuwa、「マラウイ湖の水産業と暮らし」
- *21・丸山敦、「マラウイ湖と琵琶湖の比較を考える」
- *23・岡田英基、「琵琶湖保全再生施策に関する計画」の検討状況について」
- ・釜井俊孝、「埋もれた都の防災学：都市と地盤災害の 2000 年」
- 【3.研究活動報告】
- *14・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」
- *27・西脇秀一郎、「地域における新たな森林・林業施策の一動向
—滋賀県長浜市における自伐型林業施策に関する調査報告—」
- *9・西脇秀一郎、「森林組合における里山及び奥山管理の現状
—滋賀県「東近江市永源寺森林組合」に関する調査報告—」
- ・西脇秀一郎、「京都弁護士会公害・環境委員会への 2016 年度里山実地修習」
- *12・牛尾洋也・宮浦富保・吉岡祥充、
「森林を中心とする地域資源の循環的利用による持続可能な地域づくりの先進事例
—ドイツ・バイエルン州アルゴイ地域とオーストリア・「ブレゲンツの森」地域—」
- *19・村澤真保呂、「愛知川源流域(茨川)現地視察報告」
- *26・太田真人・遊磨正秀、「河辺いきものの森」のチョウ類相」
- ・清水万由子、「琵琶湖一周フィールド研究会報告」
- *10・岡野大樹・嶋田可菜・古太恵人・浦諒太郎・山本竜平・由良康太・米住京子・山本英樹・
安達弘暉・西元康宏・井上優大・吹野僚平・藤坂妃那・今西 徹・野間元綺・菅野優香・
石田聡子・中原広貴・牛尾洋也、
「新潟県地域創生調査—国家戦略特区、世界農業遺産、日本遺産、環境政策—」
- *1・山中裕樹、「環境 DNA メタバーコーディングによる魚類相解析」
- ・森本健吾・横田岳人、「琵琶湖岸ヨシ群落について聞き取り調査」
 - ・清水憲柱・横田岳人、「武奈ヶ岳登山道の荒廃の現状」
 - ・濱田明里・横田岳人、
「伐採後放棄された里山の林床植生—伐採後経過年数の違いによる植生の違い—」
 - ・高桑進、「松村式改良型ドラム缶炭窯の性能について—黒炭窯、白炭窯と比較して—」
 - ・岩瀬剛二・小林龍昇、「メドハギに見られる帯化現象」
 - ・好廣真一、「城陽生きもの調査隊と青谷くぬぎ村—宇治川のヨシで竪穴住居をふきかえる—」
 - ・高橋佳孝、「阿蘇における野焼き(burning)と草原維持の特殊性」
- *14・林珠乃、「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

【4.研究論文】

*2・中川晃成・吉田天斗・井上康裕、「琵琶湖水位の150年、特にその自然変動および長期推移」
・鈴木龍也、「自然鑑賞型遊歩道の管理責任判断における考慮事由

—2つの落枝事故訴訟の検討を通して—

*26・遊磨正秀・太田真人、「愛知川における河床高の変動」

*27・糸川風馬・河崎佑美・西川大夢・井上裕美・坂本風輝・谷口弘明・出口真生樹・西村大輝・
長谷井典・半林奈津子・彭開源・俣野有紀・清水万由子、「里川と人々の関わり」

*27・片桐悠・清水万由子、「琵琶湖沿岸域の社会・文化に関する文献レビュー」

3. 2017年度年次報告書里山学研究

『里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～』

発行日：2017年3月31日

*24【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

・大熊孝、「日本人の伝統的自然観と治水のあり方」

・西田貴明、「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」

・瀧健太郎、「減災型治水システムの社会実装とその課題」

・釜井俊孝、「里山開発と宅地災害—戦後日本の「遅れてきた公害」—」

*9・横田岳人、「奥山の自然は蝕まれている～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか？」

・清水万由子・大熊孝・西田貴明・瀧健太郎・釜井俊孝・横田岳人、

「これからの防災・減災に求められること」

【2.研究会報告】

・池田恒男、

「日本民法によって捉えられるべき共同体的所有

—近代民法における「共有(広義)の諸形態」理論のパースペクティブに關説して」

*14・丸山徳次、「「森のある大学」の里山学—「龍谷の森」の過去と未来—」

*16・林珠乃、「地理情報システム(GIS)による『滋賀県物産誌』の視覚化

—明治初期の滋賀県における産業と自然の様相—」

*27・丸山徳次、「里湖(さとうみ)を包摂する里山学の展開」

・田井中慎、「カンボジアにおける野蚕エリサン養蚕事業

—持続可能な開発に向けた企業の取り組み—」

*25・吉岡祥充、「叢書合宿研究会報告」

*21・林珠乃、「マラウイ湖国立公園の森林資源の利用と保全」

*21・太田真人、「アフリカの里山—森林資源の利用と保全のバランス(植生調査報告)—」

*11・劉璨、「中国の集団林権制度改革の政策課題に関する研究」

*11・劉浩、「中国の林業財政投資政策に関する研究」

・清水万由子、「シンポジウム「里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生～」

に向けた事前研究会報告」

*13・高村学人・西脇秀一郎・古積健三郎、

「入会権をめぐる判例・学説の法学的検討」

」

【3.研究活動報告】

*11・吉岡祥充・金 紅実・池田恒男・谷垣岳人・高桑進・張志濤・吳偉光・吳ウ松・謝屹・渠美・劉

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- 浩・張婷婷、「日中森林政策研究ワークショップ「日中森林資源総合利用と政策」の開催」
- *11・吉岡祥充・金紅実・池田恒男・谷垣岳人・高桑進、
「中国広西壮族自治区の森林総合利用に関する実態調査報告」
- *21・林珠乃・太田真人・遊磨正秀・丸山敦、
「マラウイ湖国立公園での森林資源の利用と保全に関する調査」
- *14・林珠乃・宮浦富保・谷垣岳人、「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」
- *16・林珠乃、「GISを活用した「滋賀県物産誌」の解析」
・林珠乃、「南大萱の小字についての聞き取り調査」
- *4・太田真人、「愛知川沿岸土地改良区ヒアリング調査及び現地視察」
- *17・太田真人・田中滋・高桑進・林珠乃、「蔵元 藤居本家ヒアリング調査報告」
・丸山徳次、「韓国調査団の訪問報告」
・西脇秀一郎、
「里山学と法律実務家のかかわり —京都弁護士会公害・環境委員会(自然保護部会)
第70期選択的実務修習(環境問題体験コース)の実施—」
- ・谷垣岳人、「龍谷講座×里山学研究センターシリーズ「伏見のいきものを知る」の実施報告」
- *22・牛尾洋也・本田大輝・山本英樹・由良康太・米住京子・井上優大・中田景子・安田奈於・
湯川希・斎藤菜乃子・澤村奈叶・鈴木彩有里・中原広貴・野間元綺・吹野僚平、
「フットパスを活かした地域づくり活動調査」
- *7・占部武生・水原詞治、
「褐鉄鉱触媒等による薪ストーブ燃焼ガス中 CO、HC 濃度の低減に関する基礎的研究」
- *7・占部武生・水原詞治、
「薪ストーブ燃焼ガス中未燃ガス(一酸化炭素、炭化水素)の褐鉄鉱触媒による
完全燃焼化実験—前加熱温度の影響—」
- *1・山中裕樹、
「魚類の環境 DNA メタバーコーディングにおける採水方法と検出種数の関係についての検討」
- *26・遊磨正秀、「里地・里川におけるホタル類の生息環境
—愛知川流域および瀬田丘陵における予備調査—」
・高桑進、「2017年度里山を活用した環境教育活動報告」
・好廣眞一・田中昭夫・竹内康・久田晴生・上田員也・田部富男・奥田奈々美・平賀美和子、
「子どもたちと生きものを調べ、環境の現状と変化を知る —城陽生きもの調査隊の20年—」
- 【4.研究論文】
- *2・中川晃成、「近江国野洲郡の条里と荘園」
・仲畑了・大澤晃、「龍谷の森」における細根動態の長期観測」
- *27・浅海一暉・井上滉平・大下智輝・金本さくら・川端日菜々・河野拓海・小松右詩・清水莉子・
辻井宏佑・外山由利菜・濱田直幸・藤本和・松崎里歩・松元彰汰・横山智恵・清水万由子、
「琵琶湖流域における人と水のかかわり—環境社会学から考える—」

●その他の研究成果等(ワーキングペーパー、ホームページ、口頭発表、社会貢献等)

1. 高橋佳孝、全国の草原の現状と草原の持つ公益的機能、全国草原の里市町村連絡協議会設立総会(主催:全国草原の里市町村連絡協議会)、2016年11月15日、東京
2. 高橋佳孝、草原の保全・再生に向けた募金活動～阿蘇の草原再生募金の事例～、「草原の保全・再生に向けた募金活動」に係るセミナー(主催:美祢市観光協会)、2017年2月4日、美祢

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

3. 高橋佳孝、地域資源を生かす和牛放牧の多様な価値、平成 28 年度畜産研修会(主催:山口県東部家畜保健衛生推進協議会主催)、2017 年2月 15 日、岩国
4. 須川恒、ラムサール条約を活かした湿地保全活動—世界湿地の日 in 湖北—、ラムサールシンポジウム 2016in 中海・宍道湖、口頭発表、2016 年8月 29 日、米子全日空ホテル
5. 須川恒、ラムサール条約を活かした琵琶湖湖北地方における世界湿地の日の活動(2011-2016)、ラムサールシンポジウム 2016 in 中海・宍道湖、ポスター発表、2016 年8月 28 日、米子全日空ホテル
6. 須川 恒、鴨川のユリカモメの標識調査からはじまった日本とカムチャツカの交流史、大阪自然史フェスティバル 2016 ブース展示、2016 年 11 月 19-20 日、大阪市立自然史博物館
7. 須川 恒・佐藤達夫、カラーマーキング調査におけるポータルサイトの力、大阪自然史フェスティバル 2016 ブース展示、2016 年 11 月 19-20 日、大阪市立自然史博物館
8. 須川 恒、ユリカモメ立石プロジェクト(武庫川におけるユリカモメの標識鳥記録の解明)、兵庫県立川西明峰高校理科部勉強会、2016 年4月3日
9. 須川 恒、渡り鳥は世界を結ぶ Part10『しあわせの「シジウカラガンプロジェクト」』、川西自然教室妙見山合宿(本瀧寺宿坊)連続講演、2016 年5月 14 日
10. 須川 恒、京都府のカワウ問題、確かな管理へ、カワウ対策講演・意見交換会、2017 年2月6日、上桂川漁協協同組合事務所会議室
11. 須川 恒、京都府のカワウ問題、確かな管理へ、カワウ対策講演・意見交換会、2017 年2月7日、中丹広域振興局福知山庁舎
12. 須川 恒、「今でも出てくるかもしれない冠島のオオミズナギドリ標識情報」、大阪鳥類研究グループ総会、2017 年3月 11 日、大阪市立自然史博物館
13. 須川 恒・狩野清貴、京都府冠島におけるオオミズナギドリ 標識調査・全国との連携など、オオミズナギドリ研究集会、ポスター発表、2017 年3月 25 日、東京大学柏キャンパス大気海洋研究所
14. 須川 恒・須川 渡・村上 悟、あまいろチャンネル『びわ湖と渡り鳥と物語』(76 分)、PN: 村上 悟、2016 年4月9日、栗東さくら、https://www.youtube.com/watch?v=-m57oaL_x_M305
15. 須川 恒、風になる、なら FM どっとこむ「風天」、PN: 森啓・AS: 森口知可子、2016 年 5 月 12 日 19 : 00-19 : 30 、 [http : //784press.navvita.under.jp/?cid=33](http://784press.navvita.under.jp/?cid=33) 、 [http : //navvita.under.jp/huten/20160512huten.mp3](http://navvita.under.jp/huten/20160512huten.mp3)
16. 沢田 隼・藤原壮平・遊磨正秀・丸山敦、“安定同位体比で判明した琵琶湖に生息するアユにおける各生活史型の産卵特性”、第 65 回魚類自然史研究会(龍谷大学、大津市)(2017 年 11 月 19 日)
17. 谷垣岳人、“里山の自然”、(招待講演)京都府高等学校理科教育研究会連絡協議会実習助手部会(京都市)(2017 年 5 月 18 日)
18. 谷垣岳人、“減りゆく日本の生物多様性と自然再生”、青島農業大学—龍谷大学研究交流会(中国青島市)(2017 年 9 月 13 日)
19. 谷垣岳人、“日中相互訪問型里山実習”、大学間里山交流会 2017(兵庫県三田市)(2017 年 9 月 24 日)
20. 須川 恒、“京都府冠島におけるオオミズナギドリの標識調査による生残率推定”、日本鳥類標識協会出雲大会(出雲市)(2017 年 10 月 1 日)
21. 須川 恒、“渡り鳥は世界を結ぶ Part11『北の国からの来訪者—オオミズナギドリ・ユリカモメ・コクガン—』”、(連続講演)川西自然教室妙見山合宿(本瀧寺、大阪府豊能郡)(2017 年 5 月 13 日)
22. 須川 恒、“文化財の中の探鳥”、八尾市旧植田家住宅企画展「植田家に潜む“鳥”」講演会(八

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

尾市)(2017年11月25日)

23. 谷垣岳人、“京都の里山と昆虫たち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第1回、龍谷大学(京都市)(2017年10月7日)
24. 須川 恒、“伏見とかかわる身近な鳥、渡りをする水鳥たち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第2回、龍谷大学(京都市)(2017年10月21日)
25. 好廣眞一、“伏見に暮らすけものたち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第3回、龍谷大学(京都市)(2017年11月18日)
26. 谷垣岳人・好廣眞一・須川恒・上西実、“夜の野生動物観察会”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る現地学習(京都市)(2017年11月10日)
27. 高橋佳孝、“九州の宝”千年の草原”をどう守り育むか”、第31回肥後の水とみどりの愛護賞シンポジウム(熊本市)(2017年10月25日)
28. 高橋佳孝、“火山と草原”、阿蘇ガイド養成講座(主催:阿蘇ガイド養成講座実行委員会)(阿蘇市)(2017年10月21日)
29. 平館俊太郎・楠本良延・森田沙綾香・小柳知代・横川昌史・高橋佳孝、“表層土壌の化学特性および管理手法が草原における出現植物種に及ぼす影響～阿蘇の草原における事例～”、日本土壤肥料学会九州支部例会(佐賀市)(2017年9月22日)
30. 高桑進、“日本の森林資源の保全と有効利用について～若者へのメッセージ”、第1回大阪エコパートナーシップ交流会講演(大阪市)(2017年7月29日)
31. 高桑進、“生命環境教育しています”、大阪ベンチャー研究会(大阪市)(2017年8月19日)
32. 高桑進、“環境教育プログラムとしての新しい炭焼きの取組み”、第12回大学間里山交流会(兵庫県三田市)(2017年9月24日)
33. 高桑進、“天然スギの起源と利用の歴史”、宮津杉保存会研究会(宮津市)(2017年10月9日)
34. *16 林珠乃、『滋賀県物産誌』にもとづく酒造業の分布地図作成(2017年3月)
35. 遊磨正秀(2015/12/18) 琵琶湖と流入河川の魚類と環境. 滋賀県立大学環境科学セミナー, 彦根市
36. 遊磨正秀(2015/7/3)「ゲンジボタルの生態-移動性および個体群動態-」, シンポジウム「ホタルの発光多様性と環境保全」in 昆虫 DNA 研究会 第12回研究集会, 福井県あわら市.
37. *14 竹村嘉礼(2016)地表性甲虫の多様性に対する里山の部分的伐採の影響、龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 2015年度卒業研究

●報道掲載リスト

1. “ピンクのキリギリス見つけた 京都、色素が変異”、京都新聞、2017年9月23日
2. “ゲンゴロウ見つけたよ”、京都新聞、2017年7月9日
3. “鳥と人と海鳥の遺産・冠島”、京都大学新聞
(Web版 <http://www.kyoto-up.org/archives/2575>)、2017年7月1日
4. “オオミズナギドリ 府鳥、繁殖に陰り? 舞鶴・冠島で生態調査”、毎日新聞(京都地方版)、2017年8月29日
5. “龍谷講座×里山学研究センター 身近な鳥に関心を”、龍谷大学新聞(625号、Web版 <http://www.rpress.net/article/625/07.html>)、2017年11月15日
6. “「カブ王国」滋賀 種子保存の支援体制を”、京都新聞、2017年11月24日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

7. “かんさい情報ネットten.”、読売テレビ、2017年12月1日
8. “千年の草原 地下水育む「肥後の水とみどりの愛護賞」表彰式 講演 阿蘇草原再生協議会 高橋佳孝氏”、熊本日日新聞、2017年11月24日
9. ゲンゴロウ米 地域活性 龍谷大生がブランド提言 京丹後、過疎の三重・森本地区／京都”、毎日新聞(地方版、<https://mainichi.jp/articles/20180116/ddl/k26/100/394000c>)、2018年1月16日

●その他(各種委員会活動、成果頒布等)

1. 谷垣岳人、京都府外来種実態調査専門委員会(昆虫・クモ班代表)、2016年～現在
2. 須川恒、環境省モニタリング1000ガンカモ類検討委員会委員、2004年～現在
3. 須川恒、環境省モニタリング1000海鳥調査検討委員会委員、2008年12月～現在
4. 須川恒、京都府カワウ対策協議会(副会長)、2009年～現在
5. 須川恒、滋賀県カワウ総合対策協議会委員、2010年7月～現在
6. 須川恒、三重県紀伊長島鳥獣保護区カワウ対策連絡協議会委員、2011年8月～現在
7. 須川恒、関西広域連合関西地域カワウ広域保護管理計画検討委員会委員、2011年11月～現在
8. 須川恒、大阪府榎尾川上流部自然環境保全対策検討委員会委員、2012年4月～現在
9. 須川恒、滋賀県カワウ総合対策協議会個体数調整部会委員、2013年11月～現在
10. 須川恒、新名神高速道路、滋賀県域自然環境保全検討会WG委員、2014年8月～現在
11. 須川恒、新名神高速道路、京都府域自然環境保全検討会委員、2015年10月～現在
12. 須川恒、京都府外来種実態調査専門委員会(鳥類班代表)、2016年～現在
13. 須川恒、滋賀県カワウ特定計画(第3次)検討委員会、2016年～現在
14. 須川恒、京都府希少野生生物保全専門委員会(2017年京都府生物多様性戦略検討)2017年10月～現在
15. 高桑進、京都伝統と文化の森推進協議会森林整備・景観対策専門委員会委員長、2016年4月～現在
16. 金紅実、特定非営利活動法人近畿環境市民活動相互支援センター(NPO 法人エコネット近畿)理事、2017年2月～現在
17. 宮浦富安、材木育種技術戦略委員会(森林総合研究所材木育種センター)委員、2014年度～現在
18. 宮浦富安、近江湖南アルプス自然休養林管理運営協議会(会長)、2014年度～現在
19. 丸山徳次、文部科学省:大学設置・学校法人審議会(大学設置分化会)専門委員(環境専門委員会)、2012年～2014年[2014年度は環境専門委員会主査]
20. 牛尾洋也、京都市景観審査会・委員:2013年11月～現在
21. 牛尾洋也、京都市所有者不明等の森林に関する対策検討会議・座長:2017年11月～2018年3月
22. 牛尾洋也、東近江市鈴鹿の森おこしワーキンググループ・アドバイザー:2017年12月～現在

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし

法人番号	261014A01
プロジェクト番号	S1511030

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成27年度	施設	16,259	9,676	6,583				
	装置	0						
	設備	16,027	5,343	10,684				Miseqシステム
	研究費	12,091	8,777	3,314				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	23,684	16,721	6,963				
平成29年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	20,291	14,974	5,317				
総 額	施設	16,259	9,676	6,583	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	16,027	5,343	10,684	0	0	0	0
	研究費	56,066	40,472	15,594	0	0	0	0
総 計	88,352	55,491	32,861	0	0	0	0	

※ 3年目(または2年目)は予定額。

17 施設・装置・設備の整備状況(私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設 の 名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
里山学研究センター (内訳)	27	292.00m ²		50			
紫光館3階 里山学研究センター事務室		140.81m ²	2	30	既存施設	—	
(瀬田)3号館301研究室		28.35m ²	1	3	既存施設	—	
(瀬田)3号館302研究室		26.25m ²	1	3	既存施設	—	
紫光館3階PD・RA室		96.00m ²	1	2	13,167	6,583	私学助成
紫光館3階展示・会議スペース							
紫光館3階前室							

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

96 m²

(様式2)

法人番号	261014A01
プロジェクト番号	S1511030

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
【該当なし】				h			
(研究設備)				h			
Miseqシステム	平成27年度	MS-J-001	1台	501	16,027	10,684	私学助成
(情報処理関係設備)				h			
				h			

18 研究費の支出状況 (千円)

年度	平成 27 年度		
小科目	支出額	積算内訳	
		主な用途	金額
教育研究経費支出			
消耗品費	2,750	用品・消耗品・資料図書	2,750
光熱水費	0		0
通信運搬費	193	郵便費	193
印刷製本費	1,089	書籍、年次報告書	1,089
旅費交通費	1,224	出張旅費・交通費	1,224
報酬・委託料	546	報酬・委託料	546
賃借料	130	会場賃借料等	130
(その他)	581	会合費・雑費・謝金等	581
計	6,513		
アルバイト関係支出			
人件費支出 (兼務職員)	820	経費担当アルバイト代 学生アルバイト代	568 252
教育研究経費支出 計	820		
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図書	723	什器	723
計	723		
研究スタッフ関係支出			
リサーチ・アシスタント	1,455		1,455
ポスト・ドクター	2,571		2,571
研究支援推進経費	0		
計	4,026		

(千円)

年度	平成 28 年度		
小科目	支出額	積算内訳	
		主な用途	金額
教育研究経費支出			
消耗品費	6,294	用品・消耗品・資料図書	6,294
光熱水費	0		0
通信運搬費	93	郵便費	93
印刷製本費	749	年次報告書	749
旅費交通費	2,460	出張・交通費	2,460
報酬・委託料	2,610	報酬・委託料	2,610
賃借料	134	会場賃借料等	134
(その他)	697	会合費・雑費・謝礼等	697
計	13,037		

(様式2)

		法人番号	261014A01
		プロジェクト番号	S1511030
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,027	経費担当アルバイト代 562 学生アルバイト代 465	時給900円、年間時間数624時間、実人数1名 時給900円、年間時間数517時間、実人数14名
教育研究経費支出 計	1,027		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	1,165	高速印刷機器 1,165	AOプラス対応大判インクジェットプロッター等
計	1,165		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	3,201	3,201	学内1人
ポスト・ドクター	5,247	5,247	1人(12ヶ月間)
研究支援推進経費	0		
計	8,448		

(千円)

年 度	平成 29 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	2,345	用品・消耗品・資料図書	2,345
光熱水費	0		0
通信運搬費	114	郵便費	114
印刷製本費	3,128	書籍、年次報告書	3,128
旅費交通費	3,065	出張・交通費	3,065
報酬・委託料	1,555	報酬・委託料	1,555
賃借料	137	会場賃借料等	137
(その他)	465	会合費・雑費等	465
計	10,809		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,426	経費担当アルバイト代 578 学生アルバイト代 848	時給900円、年間時間数642時間、実人数1名 時給900円、年間時間数942時間、実人数24名
教育研究経費支出 計	1,426		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,796	2,796	学内1人
ポスト・ドクター	5,252	5,252	1人(12ヶ月間)
研究支援推進経費	0		
計	8,048		